



アートが生まれる場所

アートが紡ぐ時間

九州大学ソーシャルアートラボ (SAL) 平成27年度活動報告書

ごあいさつ

九州大学大学院芸術工学研究院は、平成27年4月1日、新しい教育研究機関ソーシャルアートラボ（SAL）を設置しました。このラボでは、平成27年度、文化庁「大学を活用した文化芸術推進事業」の一環で、「新しい交流の場を切りひらくアートマネジメント人材育成事業ー九州沖縄地域のアートマネジメント人材育成ネットワークの構築」を主軸とした活動を展開して参りました。九州沖縄地域では人口減少による地域の経済的・文化的基盤の脆弱化、それに伴う伝統文化の担い手不足、自然環境保全システムの弱体化が深刻な問題となっています。こうした現状に鑑み、本事業は、地域のネットワークを創造的に活用しながら、地域の課題と向き合い、伝統文化や自然資源をいかしたアートプロジェクトを企画運営できる人材育成の体系的プログラムを考案実施することを目的としました。また、人材育成事業と並行して、SALでは、地域の文化や資源を発掘し、当大学のテクノロジーとアートによって新たな発信力をもたせる試みも実施してきました。

この報告書は、SALの平成27年度の活動を記録したものです。キックオフ・フォーラムから人材育成プログラム、現代神楽の公演やネットワーク構築のためのミーティングの試みなど、多岐に渡ります。ご高覧いただき、今後の活動に向けてのご意見などを賜りますと幸いです。

本事業への助成を賜りました文化庁、共催団体としてご支援いただいた公益財団法人 福岡市文化芸術振興財団、そして本事業にご協力いただいた皆さまに、この場を借りて御礼申し上げます。

平成28年3月
九州大学大学院芸術工学研究院長
安河内 朗

アートが生まれる場所

アートが紡ぐ時間

目次

プロローグ 2

Social Art Lab とは	2
ソーシャルアートラボの描く未来	3
芸術は必要か？	4
SALの一年〈年間スケジュール〉	4

Part 1 キックオフ・フォーラム 5

第一部：基調講演	7
第二部：九州沖縄地域の取組紹介	9
第三部：ディスカッション	11
キックオフ・フォーラム総括	12

Part 2 人材育成プログラム 13

Section 1 基礎コース	14
講義メモ	15
基礎コース総括	21
Section 2 実践コース「企画立案プログラム」	22
①フィールドワーク	22
②ワークショップ1／③ワークショップ2	26
実践コース「企画立案プログラム」総括	27
Section 3 実践コース「広報戦略プログラム」	28
①ワークショップ&フォーラム	28
②広報実践	31
実践コース「広報戦略プログラム」総括	32

Part 3 焼酎の醗酵音響による現代神楽「甕の音なひ」 33

現代神楽公演「甕の音なひ」次第	35
現代神楽「甕の音なひ」創作ノート	37
連携企画：生物音響学会ポスター展示	38
連携企画：「カルチャーナベ」フィールドトリップ	39
現代神楽公演「甕の音なひ」総括	40

Part 4 ソーシャルアートカフェ 41

第1回～第4回	42
---------	----

エピローグ 44

ソーシャルアートラボの一年を振り返って	44
ソーシャルアート・フォーラム	45
アートを「デザイン」するマネジメント	46
講師&ゲストの所属機関+お世話になった機関	47
おわりに	48

〈コラム1〉アートのある風景	24
〈コラム2〉アーティストがつくる地域の未来	27
〈コラム3〉文化の多様性を支える地域からの情報発信	32

Social Art Lab とは

九州大学ソーシャルアートラボは、社会の課題にコミットし、人間どうしの新しいつながりを生み出す芸術実践を「ソーシャルアート」と捉え、その研究・教育・実践・提言を通じて、新しい生の価値を提示していくことを目的とします。



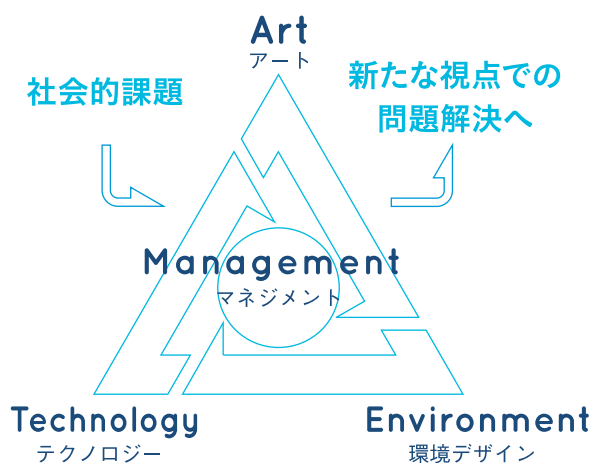
コンセプト

ソーシャルアートラボは、「面白い」を形にし、“豊かさ”を見える化する」をキャッチフレーズに、様々な異なるものどうしのデモクラティック（民主的）な交流を通して、ポストグローバル時代を見据えた社会のデザインを考案することを目指します。

ここでは「アート」を美術分野に限定せず、広義の芸術を示す総称として用い、作品という側面だけでなく実践的側面も重視しながら、環境デザイン、テクノロジー、マネジメントの観点からの総合的アプローチを試みます。（※ 英語では、socially engaged art, social practice art などと呼ばれています。）

背景

近代以降、技術に裏打ちされた表現としてのアートは、宗教的呪縛から逃れるため、伝統的な共同体社会規範から解放されるため、政治や商業主義から一線を画すため、個人の内面にかかわる、社会生活から自律したものとして存在してきました。しかし、理性と感性、公と私の切り離され、科学のみでは解決されない社会的課題が山積する今日においては、むしろ人間の内面と外の世界の行き来を可能にするものとして、人と人の関係性を再構築するものとしてアートが必要とされています。



ミッション

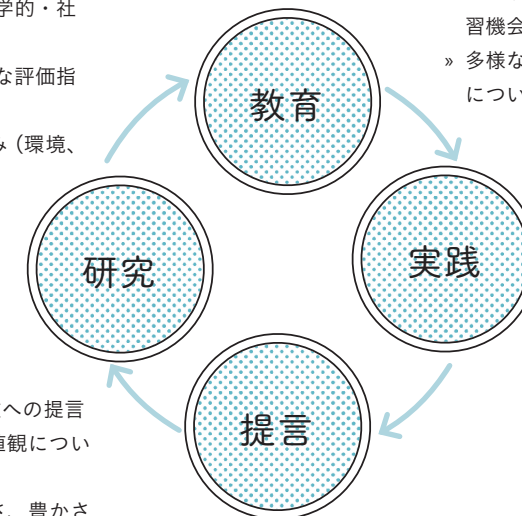
科学と理性だけでは解決困難な社会的課題に対して、アートを用いて解決へと導く方法に関する研究・教育・実践・提言を、学際的共同作業を通じて行います。つねに研究成果に基づく教育・実践・提言という流れを意識し、社会的実装を目指します。

社会の中でのアートの役割や効果に関する研究を行います

- » 社会の現況や制度への課題認識に基づく研究
- » 従来のアートの枠組みを超えた新しいコンテンツやデザインに関する研究
- » アートが人間に作用する生理的・工学的・社会的メカニズムに関する研究
- » アートの役割や効果を記述する新たな評価指標の研究
- » アートの効果が最大化される仕組み（環境、マネジメント等）に関する研究

アートを活用した課題解決の手法を学びます

- » 従来の芸術学、アートマネジメント、環境デザイン等を統合した教育プログラムの開発
- » 現場実践に参加するインターンシップ、サビスラーニング、ボランティアを通じての学習機会の提供
- » 多様な人間、多様な生き方など、多様な価値について考える教育



課題の解決へと導くアート実践を行います

- » 地域の課題を解決へと導く共同的艺术実践のデザインやマネジメント
- » 自然・文化環境を生かした持続的なアートプロジェクトのデザイン
- » 人々のアートへのアクセスの創出
- » 身の回りの生活環境を豊かにする実践

アートを活用した社会デザインの提言を行います

- » 環境政策・文化政策についての行政への提言
- » ポストグローバル社会の新しい価値観についての一般への提言
- » 人間の創造／想像行為がもつ面白さ、豊かさに関する提言
- » 社会的課題（テーマ）に関する研究・教育・実践の体系化

ソーシャルアートラボの描く未来

平成19年、九州大学大学院芸術工学府に「ホールマネジメントエンジニア（HME）育成ユニット」が開設されました。ハコモノと揶揄されることも多い劇場や音楽堂の真の有効活用を目指して、アートと工学の知識をベースにして効果的なマネジメントが実行可能な、総支配人とも呼べる人材育成を行ってきました。特に音楽・音響を取り巻くアートを中心に据えたカリキュラム構成でしたが、そのコンセプトは現在も大学院芸術工学府でのプログラムとして受け継がれており、少しずつではありますがこれらの分野への修了生を輩出しつつあります。

ソーシャルアートラボ（SAL）はHMEの発展形として平成27年にスタートしました。芸術工学の潜在力を集約し、具現化することのできる組織のひとつとして位置付けられるものです。アートの範囲を限定することなく、さらに九州大

学大学院芸術工学研究院が持つ工学という道具を使い、音響や環境デザインをはじめとする多くの知見をフルに活用して、さまざまな社会問題解決のための研究、教育、実践、提言を目指しています。

アートは時に人を癒し慰め、あるいは鼓舞し、ひとときのあいだ異空間へ招待してくれることさえもあります。アートが持つチカラはまだまだ深遠なものでしょう。何かの問題が解決へ向かう時、いつでもそばにアートが寄り添っていて、その後ろにはSALが居るように進んでいきたいと考えています。SALの活動にはみなさまとの幅広く息の長い連携が不可欠です。どうぞ引き続きよろしく願いいたします。

九州大学大学院芸術工学研究院教授
ソーシャルアートラボ ラボ長
尾本章

芸術は必要か？

20世紀後半、芸術は趣味や余暇の対象で、豊かさを象徴するものと考えられていました。たしかに「芸術作品」なんかなくても、私たちは生きていくことができます。しかし、非言語コミュニケーションを基軸とする「芸術的な表現活動」は、単なる豊かさの象徴ではなく、異なる人間が社会の中で共存していく上で不可欠なものであることが、近年のさまざまな研究からわかってきました。

とくに人間の知覚や認知のメカニズムへの理解が深まり、情動コミュニケーションが「ミラーニューロン・システム」を通じて行なわれることが明らかになると、非言語コミュニケーションの重要性が再認識されるようになりました。ミラーニューロン・システムというのは、他の人（もの）の行為（動き）を見たり聞いたりしていると、まるで自分がその人（もの）であるかのように、鏡のような反応を引き起こす神経系のことです。人間にはこうした神経の作用があり、それが他者と自分を結びつける重要な役割を担っていることが示唆されているのです。

芸術的な表現活動はこの神経系の働きに基づくコミュニケーションであり、同時に、この神経系の発達を促すものでもあります。たとえば、①芸術表現は、類似や連想によって受け取り手の共感に直接働きかけることができます。そのことによって、しばしば誤解を生みつつも、言葉では表現の難しいことを直感的に伝えたり、同じ言葉を解さない者どうしの交流を促したりします。また、②協働の制作や表現は、他者と体験を共有する機会となると同時に、その作品は、他者とのつながりを物語る記憶の結晶となります。ところで、私たち人間は、他の誰とも異なるユニークな存在でありたいと望みながらも、孤立を恐れ、誰かと仲間でありたい、共感されたいという欲求を持っています。③芸術表現は、どんなオリジナルなものでも、先人が築きあげた文化や身体感覚を土台にしているため、この人間の両義的な欲望を叶える方法としてもうまく機能します。

人間どうしがともに社会で生きていくためには、論理的なコミュニケーションだけでは不十分です。実際、理性とは異なる共感ベースのコミュニケーション・ツールをたくさん持っているほど、社会で生き抜いていくことは楽になります。類型化され、定型化された表現を身につけるだけでなく、新しい共有の表現を他者とともに創造し、共感し合うことで、私たちは生き抜く術を獲得することができます。それは、価値が多様化し、政治や経済だけでは解決できない社会的課題が山積する現在において、まさに必要なことではないでしょうか。

九州大学大学院芸術工学研究院准教授
中村 美亜

SAL の一年

《年間スケジュール》

キックオフ・フォーラム

6月13日（土）

基礎コース

第1回 7月18日（土）

第2回 7月19日（日）

第3回 8月9日（日）

第4回 9月27日（日）

実践コース「企画立案プログラム」

フィールドワーク

10月10日（土）～11日（日）（1泊2日）

ワークショップ① 10月24日（土）

ワークショップ② 10月30日（土）

実践コース「広域戦略プログラム」

ワークショップ① 9月4日（金）

フォーラム①「メディアに響く企画・広報」

9月4日（金）

フォーラム②「九州という固有性から発信する」

9月5日（日）

ワークショップ② 9月6日（土）

焼酎の醗酵音響による現代神楽

「甕の音なひ」

公演 12月12日（土）

ソーシャルアートカフェ

第1回 6月26日（金）

第2回 7月10日（金）

第3回 9月5日（土）

第4回 10月2日（金）

ソーシャルアート・フォーラム

2月28日（日）

Part 1

キック オフ・ フォー ラム

6
june

キックオフ・フォーラム

13(土)

..... ソーシャルアートカフェ①

7
july

..... ソーシャルアートカフェ②

..... 基礎コース①②

8
august

..... 基礎コース③

9
september

実践コース〈広報戦略プログラム〉

ワークショップ①

フォーラム①「メディアに響く企画・広報」

フォーラム②「九州という固有性から発信する」

ワークショップ②

..... ソーシャルアートカフェ③

..... 基礎コース④

10
october

..... ソーシャルアートカフェ④

実践コース〈企画立案プログラム〉

フィールドワーク

ワークショップ①

..... ワークショップ②

11
november

12
december

..... 現代神楽公演「甕の音なひ」

ソーシャルアートラボの設立と「新しい交流の場を切りひらくアートマネジメント人材育成事業－九州沖縄地域のアートマネジメント人材育成ネットワークの構築」の事業開始を記念するキックオフ・フォーラムを開催しました。フォーラムでは、文化政策、地域づくりの二人の専門家からの基調講演に続き、九州・沖縄地域でのアートマネジメント活動の紹介、ディスカッションが行われました。アートに携わる人、地域おこしに携わる人、大学関係者などおよそ百名が、九州各地や四国・関西・東京から集いました。

6月13日(土) 13:00-17:00
九州大学大橋キャンパス多次元デザイン実験棟ホール

〈プログラム〉

第一部：基調講演

野田 邦弘 鳥取大学教授
飯盛 義徳 慶應義塾大学教授

第二部：九州沖縄地域の取組紹介

宮本 初音 福岡県・ART BASE 88 代表
黒田 恵子 熊本県・河原町文化開発研究所 代表
福森 伸 鹿児島県・しょうぶ学園 統括施設長
杉浦 幹男 沖縄県・公益財団法人 沖縄県文化振興会 文化芸術推進課 プログラムディレクター

ナビゲーター：大澤 寅雄 SAL アドバイザー、ニッセイ基礎研究所准主任研究員
中原 恵 公益財団法人 福岡市文化芸術振興財団 職員

演奏：芸工アヴァンギャルド・コンサート
「芸工に残された古楽器の試み」

解説：藤枝 守 九州大学大学院教授

第三部：ディスカッション

司会：中村 美亜 九州大学大学院准教授



第一部：基調講演

はじめに鳥取大学の野田邦弘教授より、時代による芸術観の変遷、現代が求めるアート、アートの地域での役割についての話がありました。

「大学×アート×地域：大学のアートプロジェクトを考える」

野田 邦弘（鳥取大学地域学部教授）

アート観の変遷

近代(モダンの時代)においては、芸術というと、社会から隔絶した形でアーティストが作品を孤独につくっているというイメージがあります。そこでは理性と感性が対立しているし、公と私も対立しています。ところが、ポストモダンの時代になってくると、芸術、アートの役割が変わっていきます。個人と外界を架橋する役割、あるいは人と人をつないでいく役割が求められる。さらに、社会問題を解決していくためにアートが何か貢献できるんじゃない、という話になってきます。最近、『ソーシャリー・エンゲイジド・アート入門』（フィルムアート社、2015）という本が日本語に訳されました。この本は、世界とエンゲージして世界をよく変えたいと思うアーティスト、パブロ・エルゲラによって考案されたソーシャル・プラクティスと、社会的相互行為の重要性について説いています。

現代社会におけるアートの役割

今、アートに特に期待されているのは、「場」を作ること。たとえば古い建物のリノベーションを行う場合、デザイナー・



野田先生の講演の様子

建築家・アーティスト等、クリエイティブな人たちが来て何か作品をつくったり、製品をつくったり、アイディアを出したりします。するとネットワークができ、アート、ビジネス、サイエンスが生まれ、産業につながる可能性もできます。このようにアートを核として様々につながりが生まれます。注目すべきは、その「セレンディピティ」です。

セレンディピティの重要性

セレンディピティとは、予想していなかったことが起こることです。それは、多様な人たちが交流するカフェなどで生まれます。クリエイティブな人が集まり、そこでしか生まれない新しいひらめきやアイディアを創出できる広がりのある場が必要となってくるわけです。新しいひらめきは人と人との出会いや議論の中から生まれてくるのです。

鳥取における地域の魅力づくり

鳥取は中心市街地の地価下落に歯止めがかからず、若年層も流出しています。それを止めるには、地域の魅力づくりが必要と考え、大学が主導し、使われていない地域資源に着眼した新たな取り組みを開始しました。具体的には、歴史的建築物にアーティストを呼び、新しい視点でその場を捉えなおす活動を行っています(ホスピタイルプロジェクト)。また、近くのつぶれた旅館を、学生たちの活動拠点としています(COTOMEYA)。こうした動きを契機に、今度はリノベーションの取り組みが民間レベルで起こり、鳥取市主催でリノベーションスクールが始まったりしています。

人間年をとれば知恵とか知識が増えるけれど行動力は落ちてきます。学生はその逆なので、いいとこ取りしたらいいと思っています。なので、今は大学が中心になって、若い力を地域の活性化と文化振興に貢献できるような仕組みづくりをしています。

野田 邦弘 鳥取大学地域学部教授（文化政策、創造都市）
2004年までは横浜市職員。2003年には「クリエイティブシティ・ヨコハマ」の策定に関わり、新設の文化芸術都市創造事業本部創造都市推進課初代担当課長に就任。文化経済学会理事（元理事長）、鳥取県文化芸術振興審議会長。鳥取でアートプロジェクト「ホスピタイル」に取り組む。

鳥取大学地域学部地域文化学科

<http://www.rs.tottori-u.ac.jp/bunka/index.html>

🌐野田邦弘フェイスブックページ
https://www.facebook.com/kunihiro.noda.1
🌐ホスピテイルプロジェクト
http://hospitale-project.jimdo.com
🌐COTOMEYA http://cotomeya.weebly.com

□野田邦弘『創造都市・横浜の戦略 クリエイティブシティへの挑戦』学芸出版社、2008年

□野田邦弘『文化政策の展開 アーツ・マネジメントと創造都市』学芸出版社、2014年



つづいて慶應義塾大学の飯盛義徳教授より、セレンディピティを誘発するためにはどういうマネジメントをすればいいのかという話がありました。

「地域づくりのマネジメント：効果的なプラットフォームをいかにつくるか」

飯盛 義徳（慶應義塾大学総合政策学部教授）

社会的創発

地域での活動で目指すべきことは、次から次へと新しい自発的な活動が生まれることです。これを私たちは「社会的創発」と呼んでいます。これが生まれやすい仕組みをどう設計するかというのが課題となるわけです。また、いろんな人たちの協働を促進するコミュニケーションの基盤となる道具や仕組みや空間のことをプラットフォームといいます。上手にこれを設計すると、相互作用が誘発されて、創発、つまり予期もしない何か面白いこと、楽しいことが起こってくるのです。「計画された非計画性」というのが大切になってきます。

資源化プロセス

資源（ヒト・モノ・カネ・情報）はどの地域にもあるものですが、地域の魅力や個性はその土地の人にとってはあまりにも当たり前で、なかなか気づけません。そこで、資源にしていって（資源化プロセス）が重要になってきます。外部の視点が入ると、これまで資源とも思われていなかったものが資源になる可能性が出てきます。ですので、それが生まれやすい環境を創ることが必要になってくるわけです。つまり、何があるかということを再発見して、いろんな人のつながりをつくっていった、この資源って面白いよねとか、これいいよねという意味づけをしていった、戦略的に展開をする。言いかえると、①地域資源の再認識、②つながり形成、意味づけ、③資源展開の戦略策定、実行です。アートはこのすべて

のフェーズに関われるのではないかと考えています。

地域づくりは人づくり

今地域に必要なのは、いろんな資源を持ち寄って、寄せ集めて、新たな価値をつくれる人です。文化人類学や美術でいうところのブリコラージュができる人材をいかに育むかが課題となっており、私たちの研究室では、その人材育成の可能性について模索しています。インセンティブは多種多様だと思いますが、関心を持ってもらうための仕掛けとして資源を持ち寄ってもらうことは有効です。その資源を持ち寄ってもらうためにはどうすればいいかと考えていくのがマネジメントのポイントだと思っています。



飯盛先生の講演の様子

飯盛 義徳 慶應義塾大学総合政策学部教授、博士（経営学）上智大学文学部卒業。1987年、松下電器産業入社。1994年、慶應義塾大学大学院経営管理研究科修士課程修了後、飯盛教材株式会社入社。1999年、アントルプレナー育成スクール NPO 鳳雛塾を設立。2005年、慶應義塾大学環境情報学部専任講師。同大学総合政策学部准教授を経て、2014年より現職。専門は、プラットフォームデザイン、地域イノベーション。総務省過疎問題懇談会委員、総務省人材力活性化研究会座長などを務める。

□飯盛義徳『地域づくりのプラットフォーム：つながりをつくり、創発をうむ仕組みづくり』学芸出版社、2015年
□飯盛義徳『社会イノベータ（ケース・ブック）』慶應義塾大学出版会、2009年

第二部：九州沖縄地域の取組紹介



福岡、熊本、鹿児島、沖縄からのゲストより、日頃の取組が紹介されました。第二部のナビゲーターは、大澤寅雄さん（SALアドバイザー、株式会社ニッセイ基礎研究所）と中原恵さん（福岡市文化芸術振興財団）が務めました。



ゲストの報告に先立ち、ナビゲーターの中原さんから、（公財）福岡市文化芸術振興財団がこれまで実施してきたアートマネジメント・セミナーの紹介がありました。

「境界を超えるアートマネジメントの必要性」

中原 恵（福岡県・福岡市文化芸術振興財団 職員）

当財団は、平成15年度にアートマネジメント・セミナーを初めて開催しました。それ以来、その時々の課題、テーマを捉えて毎年実施しております。平成25年度には「これからの連携事業の可能性」という少人数制での実践編セミナーを行ったのですが、そこで共通する課題の認識として、①九州のアートシーンで面白いプログラムが多く生まれているのに、それを全国のアート関係者やメディアに知ってもらう機会がないこと、②九州内でもそういった活動がジャンルや地域を越えて発信されていないこと、③そのためメンバーが集まって課題を語り合う機会がないこと、というのが挙がってきました。そこで、参加メンバーによる連携事業の実践として、「All about 九州アーツ：『ここ』でアートするということ」というイベントを企画・開催しました。九州各県からの29団体による5分間プレゼン、3団体のパフォーマンスに続き、九州のアート関係者4名が九州で活動する意義や可能性について語り合うクリティカルトークという構成でした。当財団では今後も、その時々のテーマを捉えながら、広くアート、九州という切り口で、アートマネジメント・セミナーを行う予定です。



ゲスト報告のトップバッターは、アートコーディネーターの宮本初音さん。30年以上にわたる福岡での活動を語りま

した。

「人がやらないこと、まだやっていないことを根気強くやる」

宮本 初音（福岡県・ART BASE 88代表）

1980年代はじめ、大学生だった私は、自分たちアーティスト同士で企画を立案し、美術館ではない場所で展覧会を行っていました。1990~2000年には、アートプロジェクトの先駆けといわれる「ミュージアム・シティ・プロジェクト」の運営に関わりました。私は第一回目の参加作家の候補に入っていたのですが、「作品の安定性がないので君は作家としては駄目よ」と言って落とされてしまいました。でも、色々自分で企画をしてきた経験があったので、事務局スタッフとして関わり、さまざまな調整ごとを行うようになりました。その当時はまだインターネットもなく、情報がひじょうに乏しかったので、アートマップ、アーティストファイルなどの作成を始めました。これは今に至るまで継続して行っています。とにかく人がやらないことを根気強くやる。それが新しい場を切りひらく秘訣なのではないでしょうか。



熊本市の河原町で地域を巻き込んだ活動を継続して行う黒田恵子さんは、十年前は吹き溜まりのようになってしまっていた繊維問屋街が、アートによって再び活気ある街に変わっていくプロセスを紹介しました。

「資源は人。関わる皆が生き生きとすごせる空間を作りたい」

黒田 恵子（熊本県・河原町文化開発研究所 代表）

繊維問屋が軒を連ねる河原町はハコが小さく、家賃が安く、リノベーションしやすい特徴を持っています。それに目をつけてクリエイターが集まり、次第にコミュニティアートに興味ある人が集まるようになりました。私たちの研究所の活動目的は、アートのすそ野を広げること。そこでは、誰もが持

つ表現を尊重しています。毎月第二日曜日を「河原町アートの日」と定め、オリジナルの表現であれば誰でも参加可能な開かれた場を提供しています。この地で活動を継続する秘訣は、その土地の人になること。後から来た新参者として地元の人と信頼関係を築くことが大切です。毎日の挨拶を欠かさないこと、ごみの捨て方のルールを守ること、自治会の集まりへ参加すること…。色々ありますが、そのあたりをすべてクリアできるようにしています。もちろん拠点は必要ですが、私は、資源は人だと思っています。なので、そこに係わる人たちが存在意義を感じられる、それを自分で発見できる、みんなが生き生きと過ごせる空間を作ることを目指しています。



鹿児島市で障がい者福祉施設を営む福森伸さんは、知的障がいのある人たちの矛盾なき行動やアイデアから私たちが学ぶことについて話しました。

「秩序はないけど矛盾もない。障がいのある方から私たちが学ぶべきこと」

福森 伸（鹿児島県・しょうぶ学園 統括施設長）

私のモットーは、長期的なトータルデザインを考えないこと。むしろ変更ができるということの方が大事で、それが創造性へとつながっていくと考えています。障がいを持つ利用者たちは何かアートをつくり出している意識はほぼなく、無意識と無目的を繰り返しているうちに物体が出来上がったり、声が出たりしています。多くの施設がそれに気付かず、左脳優位のシステムの世界に取り込もうとしますが、私たちは、福祉家として、彼らの価値観やアイデアの面白さをクローズアップしていこうと決めて活動しています。障がい者の人たちの突発的な行動とはかく「問題」と思われがちですが、本当は私たちも何をするか分からない。秩序を守るように教育されているけど、世の中の秩序は矛盾していると感じているんです。他方、知的障がいを持つ方は、秩序はないけれど矛盾もない。いつもそうしたいからしている。システム、ルールに従って生きるなかで私たちが忘れているけれど、本能的に必要な出来事を体感するためのヒントが、障がい者の方の日々の行動や衝動の中にはあるんです。



沖縄県の文化振興会でプログラムディレクターを務める杉浦幹男さんは、芸術文化の支援で大切なことを語りました。

「芸術文化に対する発想の転換を誰がどう促すか」

杉浦 幹男（沖縄県・沖縄県文化振興会文化芸術推進課 プログラムディレクター）

私は、沖縄文化活性化・創造発信支援事業（沖縄版アーツカウンシル）に関わっています。今、沖縄で特に大事だと思うのは、芸術文化に対していかに発想の転換ができるか否かです。そこで芸術家の意識改革に取り組んでいます。芸術文化支援では、芸術家がやりたいことを実現させるのではなく、地域、つまり沖縄の中で芸術家の活動がどういう意味を持つのかを理解してもらうことが重要です。しかし、それを伝えるのはたいへん難しい。芸術家に対して「あなたがやっていることは本当に大したことですか？」という問い掛けから始め、自分の活動が地域、沖縄の中で何の意味があるのかということに意識的になるよう促すわけです。地域の連帯が強い沖縄においてこうした問いを投げかけるのは、私みたくないわゆる「外者」にしかできないことです。あとは、沖縄の文化を沖縄以外、東京や大阪といった他地域の人に知ってもらうための企画を色々と立ち上げています。

福岡市文化芸術振興財団
http://www.ffac.or.jp/

宮本 初音（ART BASE 88）
https://artbase88.wordpress.com/

黒田 恵子（河原町文化開発研究所）
http://blog.livedoor.jp/kawara_machi/

福森 伸（しょうぶ学園）
http://www.shobu.jp/

杉浦 幹男（沖縄版アーツカウンシル）
http://www.okicul-pr.jp/

第三部：ディスカッション

「地域とアート」を捉えなおす



第一部と第二部をふまえ、これまでの登壇者によるディスカッションが行われました。司会は、中村美亜准教授（九州大学）が担当しました。



地域はアートを求めているのか？

野田 地域はアートを求めています。ある場合は拒絶し、ある場合は面白がって一緒にやったりします。地域の持続的な再生を試みる様々なプロジェクトに、近年はアートが密に絡んできていますが、多くの場合、資金の出所が自治体で、最初からフィルターがかかっています。議論されるべき課題はひじょうに多いです。

杉浦 地域のほとんどはアートを求めています。そのため、芸術家側も意識や目線を変える必要があります。アートを社会に届けるのではなく、社会の中に生きる一芸術家として、自分が社会の中でどう貢献するか、自分の存在を社会の中でどうわかってもらうかを考えなければならないと思います。芸術家もソーシャルアトラボも、芸術文化は素晴らしいという目線を一度外した方が見えてくるものが多いと思います。

地域の中でアートの可能性は
どこにあるのか？

黒田 河原町文化開発研究所の場合、やりたい人同士が集まって始めるという企画ではそもそもありません。来てみたらこの人たちだった、というところからいつもスタートしています。でも、まちおこしならまちおこしで、目的に対して思



いが一緒であるなら、あとはバラバラでもよくて、割り当てられた部分をしっかりやってくれたらそれでいいと考えています。

飯盛 アートはメディア。色々な思いを持った人たちを集め、多様な人が参加できる起爆剤になっています。多様な人たちが関わるための境界を設定するときに、アートが役に立つのではないのでしょうか？

中村 飯盛さんの話で、資源化プロセスとアートとの関係性がはっきりしました。①価値を再認識する、②つながり形成、③資源の展開、それぞれの段階でアートが関わる可能性は開かれていますね。

アートによって発見される魅力・価値とは？

福森 音がずれる…ずれを活かします。うるさいなと思ったら、叫びのグループを作ればいいわけです。ものに傷をつけてばかりの人がいる。じゃあそれを活かした彫り物を作ればいいわけです。こういう感じで、彼らの個性を活かすようにしています。

大澤 アートの持つセレンディビティはやはりとても魅力的です。予期しているものを探すならアートでなくてよいわけです。それがないと、地域とアートの関係がやせ細ってしまいます。アートは課題ではなく、魅力を発見するのだと思っています。

宮本 評価をすぐにはしないことが大切なのではないのでしょうか。評価は後世の人がするものです。それよりも私は、作家が自分でもまだ観てないものを作れるような場を提供するというのが、自分の役割だと思ってやってきました。

芸術は目的なのか？ 手段なのか？

野田 二者択一で問うことが近代のものなので、答えはできません。人間は生まれてから死ぬまで創作をやめられません。作っているものに意味がある／ないは関係ないのです。つくることが人間という種の本質だと思います。

飯盛 両方ありえます。地域づくりという文脈で考えるのであれば、どちらにアプローチしても、それを中心に色々な面白いことが起こっていくのであればよいと思います。

杉浦 二つに一つの答えを出さないといけないほど、アートって不自由ではないと思います。それぞれ、受け手や作り手によって違うものです。

福森 結果でもいいと思います。内面に向かう人にとっては、アートは結果です。あるいは、自分に向かう手段かもしれないし、自己満足なら結果かもしれないですね。メッセージを送る。自分自身が快楽を得るための手段でもあります。アートは常に日常のなかにあるのです。

黒田 コミュニティアートの立場からは、手段。でもその中の表現者にとっては目的だったりします。各々の生きている人間が自分のアイデンティティを自分でつかみ取る、勝ち取る、ということを目的としているので、どちらから始まってもいいと思っています。

宮本 困ったときはアートを食べ物に置き換えて考えてみます。体に必要なものだから食べるのか、おいしいからもっと食べたいのか。私にとってアートは、ないとやっぱり無理なんですね。目的でも手段でも、そこの先に何かあると思って向かっていけばいいのではないのでしょうか。

杉浦 その表現を借りると、今の日本では、芸術文化はおやつの位置づけなんです。それが主食になっていくといいなと思っています。

大澤 手段としてのアートと目的としてのアートが、常にうまく循環すればいいと思います。その人たちが関わり合いながら回っている。その循環が持続可能になればいいなと考えています。

第二部と第三部の間には、芸エアヴァンギャルド・コンソートの演奏がありました。

「芸エアヴァンギャルド・コンソート」とは

九州大学芸術工学科の前身、九州芸術工科大学が開学して間もない頃、30点以上の古楽器が大学に導入されました。音響実験や楽器展示が目的だったようですが、実際に公的な場で演奏されたという記録はありません。これらの古楽器はキャンパス内の一室で、人目に触れることなくひっそりと眠っていました。

それから約40年の歳月を経た2014年、九州大学藤枝研究室・池田研究室の監修のもと、この一群の古楽器を蘇らせようという「古楽器プロジェクト」が立ち上がり、芸エアヴァンギャルド・コンソートという合奏団が結成されました。

リコーダーやリュート、クルムホルン、チェンバロ、ハーディーガーディなど、ルネッサンス時代の楽器を中心に、当時の合奏曲から現代作品まで幅広い演奏に取り組んでいます。



キックオフ・フォーラム総括

このフォーラムでは、地域で行われている多様な実践およびその課題が共有された。とりわけ、人と人をつなぐ地道な活動によって、九州沖縄の各地で真にデモクラティックな場が広がりつつあることが印象的だった。フォーラムの話題から、特に重要なポイントとして、以下の三点が浮かび上がってきた。

1) ネットワーク構築

多様な取組をより多くの人に知ってもらえる場を作ること。地域内のネットワークはもちろん、地域を越えて、取組を発信する場や仕組みの考案が求められている。

2) セレンディピティの誘発

面白い活動をしている人たちをつなぎ、さらにクリエイティヴなものへとつなげていくこと。アートを切り口にする場合、この概念は特に重要。

3) プラットフォームづくり

上記のセレンディピティが継続して生起するような仕組みを作ること。そのためには人間関係も硬直化することなく、誰かがやらされている感をもたないようなマネジメントが必要になる。

多様な人々が出会い、意見を交わしながらそれぞれの役割を確認する。そのうえで、それぞれが持ち場へ帰って実践し、また地域の変化を報告し合う。このようなサイクルを作りエネルギーに回していくこと、すなわち地域での協力および協働の体制づくりを積極的に行うことが、今大学に求められていることなのだと思う。具体的なことだけではなく、大学にいる私たちができること、意識すべきことが、このフォーラムを通じて明確になった。

高坂 葉月 (SAL 学術研究員)



Part 2

人材育成 プログラム

6

june

キックオフ・フォーラム

ソーシャルアートカフェ①

7

july

ソーシャルアートカフェ②

基礎コース①②

18(土)・19(日)

8

august

基礎コース③

9(日)

実践コース〈広報戦略プログラム〉

4(金) ワークショップ①

フォーラム①「メディアに響く企画・広報」

5(土) フォーラム②「九州という固有性から発信する」

6(金) ワークショップ②

ソーシャルアートカフェ③

基礎コース④

27(日)

ソーシャルアートカフェ④

10

october

実践コース〈企画立案プログラム〉

10(土)~11(日) フィールドワーク〈1泊2日〉

24(土) ワークショップ①

30(土) ワークショップ②

11

november

12

december

現代神楽公演「甕の音なひ」

九州沖縄地域では、人口減少など社会状況の変化に伴い、従来の文化事業の企画運営やそのための人材育成方法に再考が迫られています。そこでソーシャルアートラボでは、「新しい交流の場を切りひらく」というテーマで、アートに関わるマネジメント人材育成のための新しいプログラムを考案・実施しています。なお、実施プログラムに検証を加えながらモデル化し、普及することも目指しています。

平成27年度は、「地域と向き合うアート実践の企画運営」をテーマとし、人口減少等の社会的課題を抱えつつも、自然・文化資源が豊富で、芸能や祭が盛んな九州沖縄地域の特性を踏まえた、「非都市型」のアートマネジメントの可能性を模索しました。

平成27年度のコースおよびプログラム

基礎コース

講師によるレクチャーとファシリテーターを交えたグループワークから構成。受講生は、既存の芸術ジャンルを超えて、地域と向き合う創造的な企画を立ち上げる具体的な仕掛けや方法、資金調達やネットワークスキル等の基礎知識とノウハウを学びます。

実践コース

〈企画立案プログラム〉

地域の自然資源を活用した企画の立案を通して、個々人の企画力を高めます。

〈広報戦略プログラム〉

従来とは異なる広報戦略を考案・展開することで、個々人の広報発信力を高めます。

※現場経験の少ない受講生には、実践コースに入る前に、福岡市文化芸術振興財団のインターンシップに参画し、現場で必要な一通りのスキルを修得できるフォローアップ体制も整えました。

Section 1 基礎コース

基礎コースでは、地域特性を活かした魅力的な文化芸術実践と円滑な文化芸術経営を行うための基礎知識と運営スキルの修得を目指しました。三名の専門家より、アートの何をどこに届けるか？という根本的な話題から、地域が少しずつ変化するような企画の事例紹介、そして助成金申請や組織運営のために必要なノウハウといった実務的なお話を聴きました。レクチャーの後には、講師と受講生がグループに分かれ、ディスカッションを行いました。

①7月18日(土) 10:30-17:00

講師：玉虫 美香子 アーツカウンシル東京(公益財団法人 東京都歴史文化財団) シニア・プログラムオフィサー
遠藤 水城 東山アーティスト・プレイメント・サービス (HAPS) 代表
本多 史朗 (公財) トヨタ財団 プログラムオフィサー

②7月19日(日) 10:30-17:00

講師：大澤 隆夫 (公財) 音楽の力による復興センター・東北 代表理事
立木 祥一郎 TecoLLC 代表
白神 加奈子 (公財) 水島地域環境再生財団 客員研究員

③8月9日(日) 10:30-17:00

講師：宮城 潤 NPO 法人地域サポートわかさ 理事
森 隆一郎 アーツカウンシル東京(公益財団法人 東京都歴史文化財団) PR ディレクター
八坂 千景 NPO 法人 denk-pause 代表、
大分県芸術文化スポーツ振興財団企画普及課 職員

④9月27日(日) 10:30-17:00

講師：村上 タカシ 宮城教育大学准教授、MMIX Lab 代表
坂倉 杏介 東京都市大学都市生活学部准教授
松田 美幸 福岡地域戦略推進協議会 シニアフェロー

ナビゲーター：中村 美亜 九州大学准教授・芸術社会学

大澤 寅雄 SAL アドバイザー、
ニッセイ基礎研究所准主任研究員

受講生：27 名(公共ホール施設職員、自治体職員、地域づくり専門職員、アーティスト、アートコーディネーター、アートマネジメント専攻学生)

講義メモ

12名の講師のレクチャーのポイントを抽出し、6つの観点からまとめました。

point

1

21 世紀のアート

玉虫 美香子「人と人が共振する」

アートは、①深く感じること、②正確に見ること、③それを伝える技術、④それに共振する技術、で成り立ってきたと思います。物事を深く感じ、鮮烈に知覚しているのがアーティスト。彼らは、実際に見えている形や聞こえる音だけではなく、形に現われていないが存在しているもの、感得しているものを、特別な技術(アート)を以て表現し、正確に伝えようとします。だからアートを味わい実感するためには、見えないものを見る想像力や知識も含めた受け手の側の技術も必要です。これがどの程度あるかによって、アートの届き方が変わってきます。

アートが届けるもの、その特別なものとして、①痛み、②死者と生者が交わる時空間、③宇宙的なるもの、があると思います。他人が受けている苦痛は、自分も体験しなければ本当には分かりませんが、それでも、他人の痛みに共感する体の仕組みを人間は備えていて、私たちはそれに共振することができるのです。またアートは、もうこの世にいない無数の人たちの感情や想念の上に私たちが成り立っていて、その人たちと一緒に生きているという感覚を呼び起こしてくれます。さらには、人間の感情や生物の世界を超越した宇宙の原理のようなものを、私たちの現前に見せてくれることもあります。

🌐アーツカウンシル東京(公益財団法人 東京都歴史文化財団)
<https://www.artscouncil-tokyo.jp/>

1987 年より実験的ライヴスペース「スタジオ 200」(西武百貨店運営)にて企画制作。武満徹氏企画構成の現代音楽祭「MUSIC TODAY」、
「ハヶ岳高原音楽祭」制作を経て、セゾン文化財団の助成により米国コロンビア大学大学院(アーツアドミニストレーション)留学。帰国後、ア
リオン音楽財団にて国際芸術祭「〈東京の夏〉音楽祭」の企画制作・事務局長。トーキョーワンダーサイト(公益財団法人東京都歴史文化財団)にてレジデンス・音楽事業担当を経て、同財団アーツカウンシル東京シニア・プログラムオフィサー。



森 隆一郎「面白くするための五カ条」

20 世紀的な考え方は、原因があって法則があって結果があるっていう科学、つまり物理学のセオリーに則っていたわけですが、21 世紀は、行動があって面白いなという感覚があって、次の行動が起こるとい、量子力学的な時代になってきているのではないかと思います。例えば、市民が面白いことを提案して、そこにまた面白がる人が集まって、次の面白いことが起きるとい現象が起きています。僕が考えた市民自治を面白くするための五カ条というのがあります。①小さく始める。大きく育ったら分割する。②でも、機能で分割はしない。専門化しない。専門化っていうのはある種の罠だと思っています。僕はこれの専門家ですから他のことは知りませんって言うことで、全体を俯瞰することを放棄してしまう。③仲間を増やす。長所に注目する。④ばかばかしいと思うことこそ真剣に取り組む。⑤価値判断は先送りする。価値っていうのは相対的なもので、その時代あるいは状況によって違うんです。なので、これやって価値あるのかなって思わずに、面白さの感覚を大事にすることのほうが未来志向だと思うんです。

🌐アーツカウンシル東京(公益財団法人 東京都歴史文化財団)
<https://www.artscouncil-tokyo.jp/>

1966 年東京生まれ。1990 年江東区文化センターで生涯学習講座やホール公演、コミュニティ企画等を担当、1998 年からティアラこうとうで、異ジャンルのコラボレーション企画などの企画制作。併せて、2002 年アサヒ・アート・フェスティバル設立時から参画。2007 年福島県いわき市に新設された「いわき芸術文化交流館アリオス」のマーケティングマネージャーとして準備室から参加。多様な市民にとって、施設がアートを通じた出あいや気づきの場となるための仕組みづくりを実践。フリーペーパー「TOKYO PAPER for Culture」ディレクター。2012 年より現職。



point
2

アートと まちおこし



遠藤 水城「作品よりも生き方」

東山アーティスト・プレイスメント・サービス (HAPS) が住居を支援する若手芸術家の条件は、①すぐには売れなさそう、でも志は大きいという人、それから②続きそう。つまり、「アーティストだって言うしかないわ、この人」という人です。なぜかという、物件紹介したけど、アーティストやめましたって言われたら、ただの人に安い物件を紹介したことになってしまいます。周りに人が集まって、なんか盛り上がっているなっていう人がいたら、やっぱりいい家に住んでほしいって思います。だから、「クリエイティヴ・ライフ」や「アーティストック・ライフ」という概念、つまり創造性を発揮するような生活を送っているか、そのように生きていく生存様式を持っているかというような観点が大切なんです。先に善し悪しで判断できないところがすごくあるわけです。僕は、作品そのもののクオリティも大事ですが、つまらない作品でも、クリエイティヴで幸せそうで、周りに影響を与えそうなものを作っている人、周りに影響を与える人を応援したいと思っています。

🌐東山アーティスト・プレイスメント・サービス (HAPS)

<http://haps-kyoto.com/>

□遠藤水城『陸の果て、自己への配慮』パブ、2013年

□遠藤水城『曽根裕/Perfect Moment』月曜社、2011年

九州大学比較社会文化研究学府博士後期課程満期退学。art space tetra (2004/福岡)、Future Prospects Art Space (2005/マニラ)などのアートスペースの設立に携わる。2005年、若手キュレーターに贈られる国際賞「Lorenzo Bonaldi Art Prize」を受賞。2007年より2010年までARCUS Projectディレクターを務める。2009年「福岡アジア美術トリエンナーレ」協力キュレーター、「ヨコハマ国際映像祭2009」キュレーター。2011年、「曽根裕展:Perfect Moment」ゲストキュレーター。「国東半島アートプロジェクト」レジデンス・ディレクター(2012-2014)。2011年より「東山アーティスト・プレイスメント・サービス (HAPS)」の代表を務める。



八坂 千景「ダジャレから本質へ」

市の職員がアートでまちおこしをしたいと考え、商店街の人に話を聞いたけど、「アートは分からん」と言われてしまった。それよりもトイレを増やしたり、トイレをきれいにしたりするのはどうかと。そこで、ダジャレ好きの職員が「トイレンナーレ」を発案したのです。トリエンナーレという三年に一度のアートフェスティバルがありますね。そのトリエンナーレを文字ってトイレンナーレ。それから、言葉しかなかったトイレンナーレをいかに発展させるかという話になりました。

大分では特に最近、アート優先みたいところがあるんですが、ひとたび何かが起こると、アートはもう四番目、五番目になってしまう。でも芸術って、ほんとに人が生きていくためには必要なだって思います。そんな中から、人間は排せつしないと生きていけない。その排せつするトイレという場に芸術があるということは、芸術はやっぱり生きていくために必要なんじゃないのっていう、自分なりのトイレンナーレの解釈ができたんです。

🌐おおいトイレンナーレ <http://toilennale.jp/>
NPO法人denk-pause <https://ja-jp.facebook.com/denkpause>

大分県出身。2005年にクラシック音楽のコンサート企画や音楽家をマネジメントする団体を立ち上げ、2012年にNPO法人化し、名前をdenk-pauseとする。2008年10月から九州大学大学院HME育成ユニットに参加(科目等履修生として修了)。現在は、大分県芸術文化スポーツ振興財団に籍を置き、ホールの企画、友の会「びび」運営に携わる。その他、商店街の店主たちと立ち上げた「ぶんご・ふない座」のプロデュース、おおいトイレンナーレ実行委員長を務める。



point
3

アートと コミュニティ

宮城 潤「アートかコミュニティか、ではなく」

初期の前島アートセンターでよかったのは、ミッションの一つはまちづくりではあったけれど、まちづくりとは関係なく自由に何でもできる場、公の機関よりも自由に、アートとしてとがったことができる場を担保したことです。そこでは、アーティストとの信頼関係も生まれました。そういうのを抜きにして、アーティストに「まちに対して何かしよう」って投げかけるだけでは、信頼関係はできなかったと思います。

実際、アートとまちづくりの両立ってすごく難しいと言われていますね。アーティストがまちづくりをするってことはアーティストであることを放棄する、アイデンティティが崩れると考える方もいるのかもしれませんが。でも私は、いろんなグラデーションがあっていいと思っています。それぞれのスタンスでそれぞれ表現をしたり、社会への関わりを作り出していればいいと思います。いろんな人がいろんな立場で、いろんな関わりができるような場を担保するっていうのがいいなって。だから、アート活動をしている人と全然文化が違うコミュニティ、たとえばPTAみたいところにこそアーティストに入ってほしいです。実際入ったアーティストはもうしんどくてやってられないって言うんですけど。アートを通じて違う文化に触れさせたり、揺さぶりをかけたりするというのが、コミュニティの硬直化を防ぐことにつながると思うんです。

🌐那覇市若狭公民館 <http://cs-wakasa.com/kouminkan/>

1972年生まれ。那覇市出身。沖縄県立芸術大学大学院(彫刻専攻)修了。2001年NPO前島アートセンター設立、初代理事長。wanakio(ワナキオ)など、まちなかを舞台にした現代アートプロジェクトを企画。2006年より若狭公民館に勤務。社会教育指導員、非常勤館長、業務委託団体責任者を経て、2015年から指定管理団体(NPO法人地域サポートわかさ)の館長。そのほか、文科省委嘱社会教育アドバイザーや沖縄県立博物館・美術館協議会ワーキングメンバーなども務めた。NPO法人アートNPOリンク理事。



坂倉 杏介「面白いことのパワー」

「こんなにいいことやっているのに、みんながついてこない」という人は多いです。けど、多くの場合は、やっていることがさほど面白くないんです。だから、一緒にやってくれる人が増えないんです。という身も蓋もないことを言いながら、「ご近所イノベーション学校」の養成講座では、みんなでどうすればいいか考えるわけです。単にやれと言うんじゃなくて、アイディアを発想する方法とか、イノベーションが起こる仕組みも学んだりしながらやります。

やっぱりアートプロジェクトとかアートの感性は大事です。正しいことを正しいやり方でやっても広がらない。だから、何か常識とちょっとずれたフレームを街の中に用意することによって、ちょっとした非日常になる。そうすると、普通に声を掛けただけでは来ない人が来るんです。そこで関わりがまず生まれて、その関わりというのが街に幾つも起こるような環境を創ることによって、日常の関係とか行動とか振る舞い、考え方を変えていくと思っています。小さい活動一つ一つはあってもなくてもほとんど変わらない。それによって人がすごく困ることはないくらい小さな活動なんですけど、そういうのがない街よりも、いっぱいある街の方が、きっといろんな意味で暮らしやすくなるのではないのでしょうか。

🌐坂倉杏介 <http://sakakura.jp/cahiers/>

□佐藤元状+坂倉杏介編『メディア・リテラシー入門：視覚表現のためのレッスン』慶應義塾大学出版会、2010年

□藤木淳、丸谷和史、ドミニクチェン、坂倉杏介、田中浩也『いきるためのメディアー知覚・環境・社会の改編に向けて』渡邊淳司編著、春秋社、2010年

多様な主体の相互作用によってつながりと活動が生まれる「コミュニティ・プラットフォーム」という視点から、地域コミュニティの形成過程やワークショップの体験のデザインを実践的に研究。共著に『黒板とワインーもう一つの学び場「三田の家」』、『ソーシャル・イノベーションが拓く世界』など。現在、東京都市大学都市生活学部准教授、慶應義塾大学大学院政策・メディア研究科特任講師、三田の家LLP代表、NPO法人エイブル・アート・ジャパン理事。



Point
4

震災から 学ぶこと



村上 タカシ「アートの社会システムづくり」

アートのあり方は時代によって変わります。これからは、モノだけじゃない、コトのアートが位置付けられていく必要があります。基金ができて、アーツカウンシルができて、そこでインクルーシブなアートプロジェクトをやっていく。するとそこで雇用が生まれ、アートで食べていけるようになるんじゃないかと思えます。具体的に計画してやっていかないと、単発のイベント型のものになってしまう。だから、きちんとした社会構築をして、システムをつくって、物もお金も人も創り出す循環型の社会をつくる必要があります。ただそれは一人ではできないので、自治体、企業、大学、NPO等がうまく連携、協働し合いながら相乗効果をもたせるようなシステムの再構築が必要になります。それが回ると、短期的な助成金で終わるのではなくて、継続してできるようになるはずです。

もう一つ重要なのが、どういう人がそれをマネジメントするか、運営するか、ディレクションするかということ。それがうまくいかないと、「1%フォー・アーツ」というシステムもガラス窓でいいようなところがステンドグラスに変わるなど、形骸化して、やっぱり要らないんじゃないかってことになってしまう。歴史から学ぶ必要があります。

MMIX Lab <http://mmix.org/>

熊本生まれ。1986年より畳やお米を使ったインスタレーション作品など美術家として東京で活動を開始。国内外の展覧会やアートプロジェクトに参加。また、IZUMIWAKU project「学校美術館構想」展や「アート・インクルージョン」など数々の学校やまちを使ったアートプロジェクトを企画実施。2011年東日本大震災以降は「3.11メモリアルプロジェクト」や「桜3.11学校プロジェクト」などを展開中。現在、国立大学法人宮城教育大学准教授、MMIX Lab 代表、美術家として活動中。



大澤 隆夫「中間支援組織の重要性」

私たちは東日本大震災から二週間後に復興コンサートを始め、この秋で500回を数えました。被災者の方々に寄り添って、心を支える。これが復興コンサートをやることの意味の一つだと思います。やってみてわかったことですが、こういう活動には、支援をする方と支援を受ける方の間に立つ中間支援組織がないと、人々の思いはうまく伝わりません。また、中間支援組織は行政の境界線にとらわれないんですが、このことも大事です。行政目線だと、その自治体内で活動がストップしてしまいます。だから、行政を補完するのではなくて、社会を補完する中間組織が必要だってわかったんです。それが安定した、継続的な、そして広域にわたる活動を可能にするわけです。私たちを呼んで、色々とお世話してくれる人たちは、行政の区域を超えています。そういう人たちとネットワークを作っていかなければ、なかなかこういった活動は継続できない。中間組織は、開かれたプラットフォームだということが、今回わかりました。

(公財) 音楽の力による復興センター・東北
<http://ongaku-fukko-tohoku.jp/>

1947年仙台市生まれ。東北学院大学を卒業後、仙台市役所入庁。広報課、文化財管理係長、市民生活課文化振興係長、文化振興課長等を経て、2004年度から市民局理事(市民文化事業団副理事長兼仙台フィル専務理事)、退職後も同業務を担当。2009年度から仙台フィルに専従。大震災時は仙台フィル専務理事。仙台市の仙台フィル支援強化、オペラ支倉常長「遠い帆」立ち上げ、文学館建設、ジュニアオーケストラ立ち上げ、第二回若い音楽家のためのチャイコフスキー国際コンクールおよび仙台国際音楽コンクール(2, 3回)、せんくら(初回から3回)などに従事。



Point
5

資金調達の ノウハウ

本多 史朗 「課題解決か、豊かな文化的蓄積か」

20年前は皆さんが何をやりたいのか、やった結果何がどうなるかをはっきり説明しろと言われることは少なかったはずです。しかし今は、これが説明できないと、お金は皆さんの前から逃げていってしまいます。お金なしに、文化を作ることはできません。お金を獲得するためには、課題解決型のモデルを学習する必要があります。まずは①解決しようとする社会課題を明確にする必要があります。それを絞りましょう。次に②具体的に何をやるのかという、方法論作りをします。つまり、どうやってその問題を解決しようとするか、です。最後に③どんな成果を出すのかを示します。このモデルはアメリカ発です。ミラノ、ローマ、パリのような、蓄積豊かなヨーロッパの都市の文化関係者は、このようなシンプルな考え方を好みません。ただ、皆さんの場合はどうでしょう。「課題解決型」で行くのか、「豊かな蓄積型」で行くのか。世の中の流れを見ながら、考えることが必要です。

(公財) トヨタ財団 <https://www.toyotafound.or.jp/>

1990年代前半には、在フィリピン日本大使館専門調査員として、日本のポピュラー文化を用いての国際交流の提言を行う。(公財)トヨタ財団では、ミャンマーなどでの草の根古文書保全の枠組みづくりを行う。また、助成財団センターにて、助成手法についての体系的なテキストづくりと普及に従事する。現在は、トヨタ財団「復興公営住宅におけるコミュニティ作り」プログラムを担当。最近では「原子力被災者、津波被災者、そして旧住民によるコミュニティづくりに向けて」(トヨタ財団広報誌ジョイント第18号)を執筆。



白神 加奈子「戦術ではなく戦略を」

ファンドレイジングには特効薬がないと言われています。その団体に合ったかたちで行っていくことが重要です。皆さん、つい、どうやって寄付集めたらいいのとか、助成金もらうのにどう書いたらいいのかっていう「戦術」に気を取られてしまうんですね。でもそこに行く前に、ベースとして組織をちゃんとしましょう。「戦略」として、どこを私たちは目指しているのかというところをきちんとやった上で、戦術の部分をやらないとうまくいきません。「戦略」を立てるには、組織内部でどのように意思を共有するかが大事です。ファンレイジングの問題以前に、組織のコミュニケーションが取れてない場合が八割だと言われています。組織の潜在力の棚卸し、自分たちの強み弱みは何なのかというところから始まって、理事やボランティアをきちんと巻き込んでいるかを確認します。その上で、潜在的な寄付者や今の寄付者に対してどういうコミュニケーションを取っていくのかを考える。計画を立てて実施して、結果どうだったのか? いただいた方にきちんと感謝報告しているか? こういったことをぐるぐるしながらやっていかないと、どれか一つだけやってもうまく回りません。

(公財) 水島地域環境再生財団
<http://www.mizushima-f.or.jp/>
白神加奈子(共著)『写真集 みずしま』吉備人出版、2002年

1976年倉敷市生まれ。倉敷芸術科学大学卒業、岡山大学大学院教育学研究科修了。約10年間、(公財)水島地域環境再生財団の研究員として、公害環境学習や環境保健、資料保存など公害地域の環境再生・地域づくりに携わる。ファンドレイジングの視点での組織運営や、公益財団法人移行を行うとともに、コミュニティFMとの連携、中国との交流等、国内外への情報発信に力をいれる。2013年日本ファンレイジング協会認定ファンドレーザーとなる。福岡市在住。



point 6 アートと イノベーション

立木 祥一郎 「アイデアを生み出す仕組みとは」

私は2008年にTecoLLCというソーシャル・ベンチャーを始めました。自分一人で始めた会社なので非力だけれど、知恵で社会を動かすイノベーショナルな趣向を持った会社しようと思った。だから「てこ」っていう名前にしました。私は学芸員なので、自分で絵を描けと言われても全然できません。自分の仕事としては、最初の企画に注力します。あるプロダクトを作ったとして、格好良く作っているデザインの部分は、仕事のウエイトでは5~10%ぐらいに過ぎません。勝負は、最初の企画の部分でほとんど決まるんです。建築家と組めば建築として出てくるし、美術家と組めば展示になります。でも基本的には、いつも同じ原理でやっています。

会社を作るときに、自治体とか企業とかNPOとか、大学、美術館、観光のセクターとか商店街、そういうものが一緒にいろんな計画をやって、実行組織を作って、運営出資金調達をするのがいいなと思った。この一通りのプロセスに対して、専門家がそれぞれ最適な所に入り込んでそれをコントロールする。それを組織化できると、アウトプットとしていろんなかたち、機会、空間や場が生まれるようになるわけです。いろんな人たちが結び付いてプロジェクトを支えていかないと、動かせないです、物事は。

🌐TecoLLC <http://www.teco-llc.net/>

1962年東京生まれ。東北大学文学部卒。川崎市市民ミュージアム学芸員を経て青森県立美術館整備に携わる。のべ17千人のボランティアと弘前で3回の奈良美智展を実施。青森県技術研究所を経て2008年tecoLLC設立。公共施設計画、展示設計、商品ブランディング、開発を行う。GOODDESIGN受賞5回。IMF世界銀行年次総会日本政府公式記念品企画デザイン制作。開発ディレクションしたおやさいクレヨンvegetaboは2014口ハスデザイン大賞モノ部門大賞。設計共同体と提案した青森市庁舎整備設計プロポーザル最優秀。



松田 美幸「アイデアを育む環境とは」

今、福岡では、行政が頑張る前に市民の方から何かやりたいことがあって出てきちゃって、それを行政が後押しするっていうケースが結構多いです。そこに、企業や海外のイノベーション・プログラムを持ってくことでイノベーションを加速化して、ビジネスによって社会課題を解決する。するとまた面白い人が集まってくるので、その人たちがまた原動力になる。こういう循環を生み出すことが大事になってきます。プログラムをうまく回すには、専門分野の違う人、あるいは異なる背景をもつ人が集まる環境を作るといことが最重要です。生活者やユーザーの視点でイノベーションを起こすというボトムアップ型のイノベーションを「市民発のイノベーション」と言っています。

アーティストも巻き込みながら、多様な人々が協働して何かをする場合は、企画の段階から一緒になって、最終的なゴールを共有するということが重要です。連携する方々と、何のためにやるのかを確認し合う対話力は不可欠です。そこが合意できると、あとは手法の問題なので、ずれたとしてももう一度そこに戻れるのですが、何かお互いに使われている感とか、やってあげている感があるとうまくいかないと思います。

🌐福岡地域戦略推進協議会 <http://www.fukuoka-dc.jp.com/>
 🌐福岡県男女共同参画センター <http://www.asubaru.or.jp/>

企業やパブリックセクターの戦略経営と組織変革に関わり、組織のマネジメントシステムやガバナンス改革を支援してきた。近年は、福岡都市圏の国際競争力強化に向けて、産官学民をつないで地域の経済成長を促すプロジェクトを開発・推進している。また、地域における若者や女性活躍を推進するためのNPO活動などを通じて、多様な人材が活躍する地域づくりに挑んでいる。公立大学法人福岡女子大学の学長特別補佐も務める。



受講者の声

単に方法論ではなく、経験に基づくコツみたいなのをきけた。とりあえずやるとか楽しんでやるとかいうことも長く続けるために大事なことだった。



従来の講義だけというのではなく、グループワークも入っていて、とても良かった。

九州の中で同じ志を持った仲間と出会えたことも本当に良かった。これから何らかの形で繋がれたらいいなと思っている。



「アートは金になる」と感じた。「金になる」というのは、地域にお金落ちるかとか、経済効果があるかどうか、ということ。予算を組むときにまちへの経済効果を必ず問われる為「金にならない」と取り組めないで、仕事に落とし込めずにいた。

現場でやられている方の良い話だけでなく、苦労した点も聞いたことが良かった。



期待以上のことが聞けた。自分が思いつかないようなこと、知らないことをたくさん知ることができたと思う。ただ、これから自分のいる環境に戻ったとき、どのように活かしていくのか、自分のいる地域の課題は何か、これから改めて考える必要があると感じた。

基礎コース総括

基礎コースは、毎回三名の講師からのレクチャーと、講師を交えたグループディスカッション、ディスカッションの内容共有のセッションを織り交ぜたハードな構成。朝から夕方までの長丁場にかかわらず、受講生は真剣な眼差しで話を聞き、自身の日頃の経験を引き合いに出しながら、新しい知の糸口をつかもうとしていた。ここでは、講師のレクチャーあるいは話題にのぼったテーマの中から、新しい場を切りひらき、それを継続するために意識したいポイントを挙げる。

企画とチームワーク

- » 企画段階から、協力者やステークホルダーとの密な連携と話し合いが必要。
- » 小回りが利く少人数のチームを構成すると、他分野とのコラボレーションが生まれやすい。
- » 戦術に凝るチームが多いが、チームの目的や戦略の明確化に時間をかけるべき。
- » ニーズのないところに仕掛ける試みが重要。ニーズは後からついてくる。
- » 何かがうまくいかなかったら、その都度方向転換をする勇気が必要。

ステークホルダーとの付き合い方

- » 行政担当者のネットワークを見極めること。
- » 自分自身（あるいは自分の団体）が地域のステークホルダーになること。

助成金申請

- » 団体や事業の目的の明確化と、それを伝えるためのわかりやすいストーリー作りの必要性。
- » いわゆるハリウッド映画的なストーリーを作ることが、短時間で要点を伝えるコツ。

集客と認知

- » リピーターを呼ぶ仕組みや企画作りが必要。
- » 誰に対する企画なのかを明確に伝えることが重要。

高坂 葉月（SAL学術研究員）

Section 2

実践コース「企画立案プログラム」

福岡県八女市の里山を舞台に、地域の人にとって魅力的な企画や、地域と都市の劇場を結ぶ企画を立案するノウハウを培うプログラムを実施しました。実際に里山を歩き、そこに息づく自然と文化に触れながら、新しい交流を生むアートの実践について皆で検討しました。立案した企画のいくつかは、次年度以降に実現していく予定です。

①フィールドワーク（合宿）：10月10日（土）～11日（日）

会場：えがおの森（福岡県八女市黒木町笠原）ほか

協力者・協力団体：NPO法人山村塾、日種 俊英（霊巖寺）、西岡 泰心（泰心工房）、大橋 鉄雄（大幸園）、小松 茂義（お茶の里記念館）、旭座人形芝居、宮園 菅雄（竹林整備）、宮園 すみ子（竹林整備）

②ワークショップ1：10月24日（土）13:00-17:00

会場：九州大学大橋キャンパスワークショップルーム

講師：古瀬 秀泰（もやいバンク福岡事務局）、大澤 寅雄（SALアドバイザー、ニッセイ基礎研究所准主任研究員）

③ワークショップ2：10月31日（土）13:00-17:00

会場：九州大学大橋キャンパスワークショップルーム

講師：小森 耕太（NPO法人山村塾 事務局長）、大澤 寅雄（SALアドバイザー、ニッセイ基礎研究所准主任研究員）

受講生：15名（自治体職員、公共施設職員、地域づくり専門職員、アーティスト、アートマネージャー、アートマネジメント専攻学生）

1

フィールドワーク 10月10日（土）～11日（日） 課題の同定・地域資源の発見

一泊二日の合宿形式で、地域が抱える課題の把握と地域資源の再発見にフォーカスしたフィールドワークを実施しました。福岡県八女市黒木町笠原は、平成24年の豪雨災害でキャンプ場が流され、道路が寸断されてしまいましたが、美しい棚田や茶畑が広がる地域です。



一日目

八女茶発祥の地と言われる霊巖寺、木工工房、茶園、棚田、お茶の里記念館、黒木文楽旭座人形芝居会館を訪れ、地域の歴史、人々の生活や思い、生活を豊かにするための工夫を伺いました。受講生は五感＋第六感にも耳をすまし、自身の感性で地域を捉え、小さな発見を次々と書き留めていきました。



〈上から〉
泰心工房の西岡さん
霊巖寺の日種さん
お茶の里記念館の小松さん
山村塾の小森さん
お茶の大幸園の大橋さん

二日目

「村入り」として、稲刈りと竹林整備の体験をしました。三時間程度の短い時間ではありましたが、自分の体を動かしてその土地と関わる貴重な経験となりました。午後は二日間のまとめのワークショップ。地域のリソースを活かしたアートプロジェクトのアイデア提案会を実施しました。



稲刈り体験の様子



竹林整備の様子



アートのある風景

朝廣 和夫（九州大学大学院芸術工学研究院准教授・ランドスケープ）

風景としての審美観、西洋では18世紀の英国で議論されたピクチャレスクが有名である。美しいカントリーサイドの風景は、風景画に描かれ、ランドスケープガーデンとしてヨーロッパに広がった。風景の美を守ること。それは、国立公園をはじめとする、保全を通じた地域振興として各地で実を結びつつある。

「保全 Conservation」の概念は、価値あるものを保護することだが、「面倒を見る」、「世話をする」とも解釈され、維持管理する行為を含む。景観が風景と呼ばれるのは、人の自然への行為や、イメージ形成が関係している。皆さんはどのような風景をお持ちだろうか。私の専門の農山村の保全の側面では、田舎の過疎化・高齢化が進む中で、自然と人々

が係わる機会が減少している。私たちは、風景を失いつつあるのではないだろうか。それは、感傷的な話というより、近年、豪雨災害や食料の問題として顕在化しつつある。

2004年、私は英国のケント県のキングズウッドを訪ねた。日本と同じく暗い針葉樹人工林などが広がる森である。ここの散策路沿いには大地や森の素材を活かしたアートが点在し、市民に開かれた森として整備されていた。この地域は「国立公園及び田園アクセス法」で指定された特別自然美観地域（AONB）。建築規制が行われる代わりに、伝統的な風景の美、生物多様性の再生、そして、このようなアートプロジェクトによる市民のパブリックアクセスづくりが展開されている。人々の新



たな風景づくりにより、保全を強化しようとする取組である。

英国とは違う、日本の風土に適応したアートのある風景づくりは、近年、各地で展開されている。農村や自然の豊かさをシェアする社会、アートの役割が期待される。

アイデアの例

杉材を使ったワークショップ

音が出るマップづくり

茶の実サウンドストーリー
→車が通るとカチャカチャ鳴る

循環型ライフスタイル・モデルハウス

笠原ロードレース（美しい坂のある風景を楽しむ）

木炭バスの復活

旭座人形芝居会館レジデンスアーティスト

茶の実を楽器に

巨大浄瑠璃人形茶畑

浄瑠璃FAB職人マイスターレジデンス

八女の四季フォトコンテスト

工芸・美術・デザイン
etc. + 農のスキルを身につけ農村で暮らす

古民家スクラップ&ビルドプロジェクト

家族で参加する人形浄瑠璃ワークショップ

かぐや姫を探して竹切っているうちに竹林が整備される

（自治医大ではなくて）自治医大構想 ひとつの赴任先として八女

新しい緑色募集

農村社会をデザインするコンペ

竹白皮集めバイト募集
…売上は拾った人に

自分で茶もみ→白皮のカゴに入れる（ワークショップ）→オリジナルギフト

こだわり自慢大会

護岸アートウィーク

茶木彫刻（道路側だけ）コンテスト

半農半芸レジデンス

労働歌フェス

音環境の博覧会

着せ替え人形浄瑠璃

旭座人形芝居新作委嘱

棚田スケッチ大会→
景観をじっくり見てもらう機会を作る

棚田（刈り入れ後）を使ったランドスケープ演劇

2

ワークショップ1

10月24日(土) 13:00-17:00

事業計画と事業予算書の
考え方・書き方

合宿でのアイデアを具体的な企画として立案するワークショップを開催しました。まず、もやい بانک福岡事務局の古瀬秀泰さんが、事業計画書と事業予算書を書く際の基本的な考え方を講義しました。また、本学教員の知足美加子准教授とソーシャルアトラボ・アドバイザーの大澤寅雄さんが、アートプロジェクトの企画に必要な人・モノ・カネ・情報の流れやネットワーク構築のポイントを話しました。それを受けて、受講生はアイデアの具体化に着手しました。



事業計画について説明するもやい بانکの古瀬さん



山村塾の活動を紹介する小森さん



ワークショップをリードする知足先生



3

ワークショップ2

10月31日(土) 13:00-17:00

ストーリーづくりと
企画プレゼンテーション

ワークショップ1のアイデアをグループごとにブラッシュアップし、企画書・予算書を作成しました。最後に受講生がプレゼンテーションを行い、NPO法人山村塾の小森耕太さんが企画の実現性の観点からコメントをしました。

受講者の声

普段は一人でプロジェクトに取り組んでいるが、今回はいろいろなジャンルの人たちが大勢で一つのことを考える面白さを体験することができた。

自分が住んでいる地域でも同じような課題がある。そこでの自分の生き方にも生かせるものだったと思う。

福岡市で生まれ育ったので、地域の課題の解決を考えろと言われてもこれまでは現実味がなかった。今回は二日間という短い期間であったが、地域の人の話がしっかり聞けて充実していた。

大学の授業内でやっていてもピンとこないことが多かったが、人生経験の豊かな人々と、地元の人と話をしながらやれたのはよかった。

ワークショップにはよく参加するが、上滑り感のあるものも多い中で、今回の合宿ではじっくり考えることができた。会う方が素晴らしく、皆さんが心を開いて話してくれてよかった。地元でキーになる人は大切だが、外から訪問する人も大切で、両者がチームとしてやっていくことが大事だと思う。

実践コース
「企画立案プログラム」総括

一度や二度、地域に足を運んだだけではわからないものはたくさんある。一方で、一度足を運び、地域の歴史や自然、そこに暮らす人々と触れ合うことで、見えてくるものもある。それを実感する機会となった。今回は受講生に「六感マップ」を配布したうえで、フィールドワークを開始。寺、茶園、茶畑、棚田、木工工房、人形芝居会館などを訪れ、黒木の歴史や人々の暮らしぶり、そこに息づく文化の源泉をそれぞれの感性で感じてもらった。地域の人々が語るエピソードのみならず、自然の色、音、人、風景、食べ物、香りなどを、受講生は意識して記録していく。記録した時点では、いわば点としての感覚や思いつきかもしれないが、土地の文脈を知りすぎない彼らは、その点をきわめて自由に繋ぐ。そして、スケール感も実現可能性も様々なアイデアを次々だし、他の参加者とアイデアを重ね合わせ、次第にクリエイティブな企画へと高めていった。

このワークショップは、廃校小学校を改築した「えがおの森」の教室で行われた。畳が敷き詰められた小さな教室で、受講生はあぐらをかいたり寝そべったり、思い思いの格好でアイデアを出し、最後は全員で丸くなって黒板を使いながら共有した。前も後ろもなく、全員が物理的にフラットな関係の中で会話する。初めて出会う人たちが短時間でコミュニケーションをとり、受けたばかりの刺激を異なるかたちでアウトプットすることが求められるハードなワークショップの場合、こういう環境づくりも実はとても重要だったと思っている。今回のフィールドワークの機会を作ってくださった朝廣先生、山村塾の小森さんをはじめとする八女黒木笠原の皆様、ありがとうございました。

高坂 葉月 (SAL学術研究員)

column 2

アーティストがつくる
地域の未来

知足 美加子
(九州大学大学院芸術工学研究院准教授
・彫刻)

私は「自然からの感」を受けて作品を制作している。ここでいう自然とは生命体や風土そのものでなく、それらが有機的に絡み合う何かである。アーティストはそれらを感じし表現につなげる。このような「感」のやり取り(アート)は、地域内外の認識を変え活性化の契機を与えてくれる。アートの中では各表現の相違は争いの種ではなく、豊かさとなる。芸術実践には、多様な人々を惹きつけ、巻き込む魔力があるようだ。

地域をテーマにする場合、現地以上に情報がある場所はない。今回の企画立案プログラムは、八女市笠原地区(福岡県)合宿を皮切りに展開された。ここは平成24年に九州北部豪雨災害に見舞われた地区である。多様なバックグラウンドを抱える人々と、何かを考え合わせることは刺激的だ。アイデアは、人、モノ、コトの「化学反応」の中で磨かれることを、プログラム参加者たちも感じたのではないだろうか。「良いメンバー」が、直感を「良いアイデア」に育てる。最初に留意すべきは、アイデアよりメンバーである。今回面白いメンバーが集まったのは、アートが中心にあったからだろう。

アートを通じて、人は精神的な自由と喜びを見出す。現代アーティストのヨーゼフ・ボイス(1921-1986年)は、人類の社会を意味あるものにして精神的な深みを与える鍵は芸術家が握っている、と考えた。そして誰もが芸術家(自ら考え、自ら決定し、自ら行動する人々)になるべきだとし、未来の理想社会を「総合芸術作品」とよんだ。ソーシャルアートならぬ、Artistic Society(芸術的社会)である。ボイスの野望は、地域という小さな社会から実現しつつある。

Section 3

実践コース「広報戦略プログラム」

受講生が日頃の広報の疑問をシェアしたのちに、モデルケースを用いて広報実践スキルを高めるプログラムを実施しました。今回モデルとして取り上げたのは、12月12日に博多住吉神社で奉納された現代神楽です (Part 3 参照)。これは、焼酎が醗酵する際に甕の中で鳴っている音に着目した藤枝守教授 (本学教員・作曲家) の発案にもとづき、焼酎の蔵元、神社、水引のデザイナー、九州大学の音響テクノロジーのコラボレーションが実現したことで生まれた総合芸術です。

①ワークショップ&フォーラム：9月4日 (金)～6日 (日)
会場：九州大学大橋キャンパス工作工房造形教室、3号館322教室、九州大学大橋サテライト・ルネット

ワークショップ講師：池田 美奈子 (九州大学大学院芸術工学研究院准教授・情報デザイン)

②広報実践：10月～12月

受講生：18名 (公共施設・ホール職員、地域づくり専門職員、アーティスト、アートマネージャー、大学職員、アートマネジメント専攻学生)

フォーラム1参加者：30名/フォーラム2参加者：41名

1

ワークショップ&フォーラム

a) 広報戦略のブレインストーミングとしぼり込み 9月4日 (金) 10:00-17:00

受講生自らの経験を交えながら、広報メディア同士の親和性や情報の飛距離についても検討し、どのタイミングでどのようなツールを使えばよいのかを考察しました。ワークショップ担当講師の池田美奈子准教授が考案した六角形の「ハニカムカード」を使いながら、頭の中を整理していきました。



フォーラム1

「メディアに響く企画広報」

ゲスト：小崎 哲哉 (編集者、アートプロデューサー)

塚崎 謙太郎 (西日本新聞記者)

吉田 純子 (朝日新聞記者)

第一線で活躍する記者・編集者から、日頃
どういうところから情報を集めているのか、
どのような企画が響くのかを聞きました。



b) 課題の共有 9月5日 (土) 13:00-17:30

モデルケースの「甕の音なひ」を効果的に広報する材料集めのフォーラム「九州という固有性から発信する」を実施しました。まずは、作曲・構成を担当した藤枝守教授が企画の経緯と今後の展開の可能性を話しました。それに続き、それぞれのゲストから、焼酎メーカーが抱える課題と展望、九州が持つ歴史性と文化特性、神話や民俗芸能についての話題提供があり、九州文化の深みとその発信可能性が議論されました。



フォーラム2

「九州という固有性から発信する」

モデレーター：藤枝 守 (九州大学大学院芸術工学研究院教授・作曲家)

池田 美奈子 (九州大学大学院芸術工学研究院准教授・情報デザイン)

「九州の本格焼酎を世界に」

渡邊 眞一郎 (京屋酒蔵有限会社 代表取締役)

「志賀島に眠る神々」

綾杉 るな (作家、神社研究家)

「伝承芸能を舞台にのせる」

田村 博巳 (独立行政法人日本芸術文化振興会 新国立劇場おきなわ部長)

「神話から読み解く九州」

鎌田 東二 (京都大学こころの未来研究センター教授)



c) 広報プランの作成と プレゼンテーション 9月6日(日) 10:00-17:00

二日間の情報を整理したうえで、モデルケースに即した広報戦略案のプレゼンテーションを行いました。受講生からは、通常の広報ツール(チラシやホームページ)に加え、醗酵を研究する生物学の学会との連携イベントの開催等、新しい提案がなされました。



受講生による
プレゼンの様子

受講者の声

ハニカムカードを使って構造化することで、見える化できるというのは大きな収穫だった。がむしゃらにチラシをばら撒くのではなく、ターゲットやコンセプトを考えることで、広報の奥深さを体感した。

一般的なやり方というより広報のネットワークを目的に合わせ、どのように、どのような比重で行うかの行程が重要になってくるといった。

アートにあまり関心がない人にも届く広報の方法があることが理解できた。

実際に行われたイベントを素材として三日間集中してプレゼンまで持っていく一通りの流れを体験出来てよかった。公演・イベントの内容の企画も大事だが、広報もデザインや企画の一部であると思った。

毎日内容が濃く、ついていくのが大変だった。とても興味深い講座なので、もう少しじっくり学べればなおよかった。

2

広報実践 10~12月

ワークショップで提案された広報戦略に基づき、広報活動を行いました。モデルケースの現代神楽は、現代アートや音楽に関心のある人には届く企画ですが、一般の人には馴染みがないだろうということで、今までとは異なるオーディエンスの開拓にチャレンジすることにし、以下のようにターゲットを具体的に設定し、それぞれに有効と思われる方法でアプローチしました。

ターゲットA

焼酎が好きな人たち

A4版のチラシだけでなく、気軽に手に取れるDMや、居酒屋で話題にしてもらえるようなコースター、居酒屋等にも貼れるサイズのポスターを作成し、居酒屋やバーに配布しました。



コースター



DM

ターゲットB

海外の人たち

焼酎文化を楽しく学べる焼酎英会話カードを作成し、海外からの留学生や研究者等に配布しました。英語のウェブサイトも作成しました。また、公演当日、大学のグローバル学生交流センターの担当者と共同で、留学生を対象に、博多の寺社を訪れて歴史を学び、現代神楽の公演鑑賞ができるエクスカージョンを企画し、実施しました(Part 3参照)。



焼酎英会話カード

ターゲットC

醗酵に関心のある人たち

九州大学大橋キャンパスで行われた第二回生物音響学会年次研究発表会のポスター展示に参加しました。微生物の働きによって発生する焼酎醗酵音はまさに生物の音ということで、学会と連携したコーナーを作りました(Part 3参照)。

実践コース「広報戦略プログラム」総括

ターゲットを設定し、そこに合った戦略を展開するという、広告業界では当然のように行われている手法が、アート業界ではあまり行われていない印象がある。イベントの周知となると、とりあえずA4サイズのチラシを作成し、大量に配布するというスタイルが習慣化している。今回のワークショップは、そうした従来のスタイルを見直し、これまでに届かなかった層に情報を届ける仕組みを実践的に学ぶ機会となった。

モデルケースとして選んだ「焼酎の醗酵音響による現代神楽『甕の音なひ』」は、広報戦略的思考を広げてくれる糸口をたくさん持っていた。焼酎、醗酵、神話、神楽、伝統音楽、舞踏、コンテンポラリーダンス、声のパフォーマンス、水引、能舞台…etc. ここから何を選択し、掘り下げ、つなぎ、誰に、どのタイミングで、どう知らせるか？使えるのは視覚か聴覚か？あるいは嗅覚か味覚か？

新しい聴衆層の開拓を目指すため、折衝ごとは増え、ラボの仕事や悩みも一時的に増えた。だが、複数の戦略が功を奏し、今回のワークショップを経なければ想定しなかった聴衆層にも本パフォーマンスを堪能してもらうことができた。多様なバックグラウンドを持つ受講生の柔軟な思考が、SALに新たな風を吹き込み、広がりをもたせてくれた。SAL事務局にとっても、得るものが多い四ヶ月だった。

高坂 葉月（SAL学術研究員）

column 3

文化の多様性を支える地域からの情報発信

池田 美奈子（九州大学大学院芸術工学研究院准教授・情報デザイン）

地域文化の展開には予算やマンパワーなど課題が多い。一方で、近年のメディアやコミュニティ環境の変化に目を向けるなら、新たな可能性が見出せるのではないか。そのためには、SNSを含む各種メディアや地域コミュニティの特質を理解し、最大限に活用する手だてを考えることが有効だろう。

2015年9月、主に地域で文化活動に携わっている方を対象に、ソーシャルアトラボの主催で三日間の「広報戦略ワークショップ」を開催した。ワークショップでは地域からの情報発信に焦点を当てた。情報を取り巻く環境の変化については多くの議論があるが、個人的には断片的な情報があふれ、コンテキストとして理解しづらくなっていることに課題を感じてきた。情報は得たが、その意味がつかめない。コンテキストの欠けた情報からは思考が働かない。打開策として付箋紙を多用するワークショップが定番となっている。断片化した無数の情報を分類して認識できる数のまとりにすることで何とか全体像を視野に収めようとする。しかし、それでも「分ける」という思考から逃れられず、断片は残る。分類・分割を避け、連結する。情報の断片をつなぎ合わせひとつの大きな情報ネットワークを可視化するアプローチはどうだろうか。情報の生態系を捉え構築する。生物多様性の重要性が説かれている。さまざまな気候風土や他の生物との関係のなかで変容し、環境に適応しながら代を重ね現在にいたっている。生物多様性はその生態系のなかで保証される。情報の多様性も文化の多様性もその生態系のなかで保証されると思う。

Part 3

焼酎の醗酵音響による現代神楽「甕の音なひ」



ソーシャルアトラポでは、地域資源の発掘と新たな発信方法の提案にも力を入れています。今年度は、九州の象徴とも言える焼酎の醗酵音響を素材とした神楽の創作上演を行いました。現代神楽「甕の音なひ」は、焼酎、そして焼酎を取り巻く文化を、テクノロジーとアートによってとらえ直し、新たな発信力を持たせる斬新な試みです。公演は、博多住吉神社の能楽殿で行われました。

舞台には五つの甕が登場し、五色の水引がそれぞれに結ばれています。甕の中で古来より響いてきた焼酎醗酵の音、神話、伝統的な和楽器が奏でる神遊びの音楽、コンテンポラリーダンサーと舞踏家が奉納する舞、そして生命の証である呼吸が生み出す自然な声、これらすべての要素が能舞台に流れる悠久の時間の中で一つに結ばれ、調和した世界が創成されました。これは、九州の地に根付く文化と、芸術工学研究院のアート、テクノロジーの協演によって、これまで人が聞くことのなかった小さな生命の営みに耳を澄まし、その神秘を体感する21世紀の神楽です。

焼酎の醗酵音響による現代神楽「甕の音なひ」
住吉神社能楽殿ヴァージョン

平成27年12月12日（土）
開演16:00（開場15:30）
住吉神社能楽殿

主催：九州大学大学院芸術工学研究院附属ソーシャルアトラポ
共催：公益財団法人 福岡市文化芸術振興財団
醗酵音響アートプロジェクト～藤枝研究室（九州大学）
後援：福岡県、福岡市

平成27年度 文化庁 大学を活用した文化芸術推進事業

「甕の音なひ」特設ページ
<http://www.sal.design.kyushu-u.ac.jp/kame.no.otonahi/>



現代神楽「甕の音なひ」次第

出演 笙・声：石川 高、和琴・声：中川 佳代子
舞：太田垣 悠（前シテ）、上杉 満代（後シテ）
声（地謡）：つむぎね～宮内 康乃、森戸 麻里未、ArisA、浦畠 晶子
声（口寄）：山崎 阿弥
土笛：渡辺 融

||| 前 場 |||

キヨメ 「声」（地謡）が場を変容させるなか、神楽全体をつかさどる「人長（にんじょう）」役としての「笙」の響きによって、その場が清められる。

»笙による《キヨメ》

アチメ 御神楽の演目となった「阿知女作法」のコトバ。その呪文のようなコトバが「和琴」の響きによってイソラを呼び出す。

»声と和琴による《植物文様琴歌集～阿知女》

»《阿知女作法》（「御神楽」より本歌）
阿知女 於於於於（おおおお） 於介（おけ）

イソラ 呼び出される「イソラ」（前シテ）。そして、五色の水引が結ばれた「甕」から「音なひ」の響きがあふれでるなかで、笙の響きとともに舞い、そして、姿を消す。

»笙独奏による《植物文様》
香椎潟 奈多の浦辺に 船うけて 志賀も嬉しき 相
の島かな
（宇美神楽「磯良の舞」から）

||| 中入り |||

ツクヨミ 間奏として

»声と和琴による《植物文様琴歌集～月読》
海原の 道遠みかも 月読の 明すくなく 夜は ふ
けにつつ
（「万葉集巻七」から）

||| 後 場 |||

イワト ふたたび、「イソラ」（後シテ）があらわれるが、「口寄」がその声の分身となり、甕からきこえてくる「音なひ」を呪文のコトバに変える。甕から溢れ出した「音なひ」は、能楽殿全体をふるわせ、そして、ひとつの甕に変容させていく。

オクリ 「笙」による「オクリの響き」のなかで、「音なひ」は、ふたたび甕のなかに。そして、その甕とともに「イソラ」は消えていく。「人長」がすべてをおさめて退場。「笛」のヒシギが神楽の終わりを告げる。

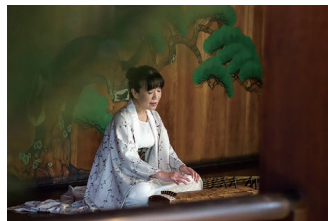
»笙による《オクリ》

||| 〈直来〉へ向けて |||

酒楽 後奏として

»《植物文様琴歌集～酒楽歌》
この御酒を 醸みけむ人は その鼓 臼に立てて
歌ひつつ 醸みけむかも 舞ひつつ 醸みけむかも
この御酒の 御酒の あやに うただのし
ささ
（「古事記」から）

- アフタートーク
ゲスト：石川 高（雅楽家）、綾杉 るな（作家、神社研究家）、長澤 宏美（水引デザイナー）
進行：藤枝 守（作曲家）
●直会



現代神楽「甕の音なひ」創作ノート 藤枝 守

カム、カビ、カモス、そしてカミ

「酒」の起源のひとつとして、穀物を口のなかで嚙んで作られていたことが伝えられています。口のなかの消化酵素による糖化作用と空気中の酵母との醗酵作用が酒を生みだすことを古代の人々は知っていたのです。その後、この「口嚙み」による糖化作用は、麴カビに引き継がれました。「カム」という行為や「カビ」の作用が「カモス〜醸す」という醗酵を引き起こす。この醗酵という微生物による生命活動は、古代人からすれば「カミ」の仕業にうつったのでしょう。そして、「カム＝カビ＝カモス」から生じた「酒」は、「カミ」への供物として、あるいは「カミ」と交感する媒体として、人間にとって欠かすことのできない存在でした。

古代から脈々と受け継がれてきた醗酵による酒造りは、多種多様な製法が考案されました。とくに、九州においては、地域ごとに異なる原材料によって特徴のある「焼酎」が数多く生産され、それが九州特有の文化のひとつとなっています。このような豊かな九州の焼酎生産のプロセスに「音」というまったくあらたな視点を与えてみる。つまり、焼酎醗酵の現場となるタンク（あるいは甕）の醪（もろみ）のなかに水中マイクを沈めて、醗酵作用をダイレクトに收音するのです。もし、古代人がこの醗酵の音を聴いたならば、それは「神」が発する声として崇めたかもしれません。

「音なひ」としての醗酵音・ㇿ(サイ)としての甕

神は姿をあらわすことはない。闇のなかにその姿はみえないが、音の気配はして、それと知らせるのである。（中略）

神は「音なひ」によって「音づれ」るのである。

古代漢字学者の白川静によるこのような言葉は、さまざまなイマジネーションを与えてくれます。醗酵の響きをカミがおとづれる際のかすかな「音なひ」にみたててみる。すると、そこに「神楽」という古代の芸能の姿がみえてきました。さらに、白川静によると、漢字の字形をかたちづくるㇿ(サイ)とは、祝詞を入れておく器のこと。その「サイ」のなかから発せられる微かな音によってカミの神意が示される。まさに、甕を「サイ」とみたて、そこから「音なひ」としての醗酵の音を呼び出すうちに、この現代の神楽は展開していきます。

能舞台の四つ柱の傍らに置かれた小さな四つの甕。さらに橋がかりから登場するもうひとつの甕。これら五つの甕は、「五色」の水引で結ばれています。能仕立てとなるこの神楽の「前場」において、その甕から「音なひ」が溢れだすなかで、「イソラ」が現れ、そして、消えていく。仲哀天皇と神功皇后にまつわる有名な伝説が残されている香椎宮の和琴によって《ツクヨミ》が詠われる「中入り」を経て、「後場」では、ふたたび「イソラ」は、不思議な「喉」をたずさえて登場します。その「喉」は、醗酵の響きを「音なひ」に変換する「口寄」となり、能楽殿の隅々にまで「音なひ」を拡散させていきます。カミをみおくり、神楽の式次第が終わったあと、「直会」へといざなう《酒楽歌》が和琴とともに詠われます。

なお、この神楽で詠われる《植物文様琴歌集》は、すべて、志賀海神社の境内に生息する樹木の電位変化のデータに基づいて作曲されています。



アフタートークの様子



試飲会の様子

写真：園田裕美

来場者の声

焼酎の醗酵音が効果的に使われていて、不思議な雰囲気に包まれた。ただ観るだけでなく、体験できてよかった。

醗酵音の心地良さに気づくことができ、古代からの人の営み、神とのつながり、音が生み出す波長だけではなく波動を会場全体で感じることができた。

音と声、動きに引きこまれ感動した。

住吉の能舞台と演者のみなさんにまさに神が舞い降りたようすばらしい舞台。前シテ（イソラ）の方が出てきたところが印象的でその後の動きもとてもすばらしかった。

かなり前衛的で難解に感じましたが、それでも引き込まれ見入ってしまった。

焼酎が出来るまでの醗酵の響きを福岡に伝わる神楽の物語にあわせて、音楽（歌）（笙と和琴）と舞で表現したのがすばらしかった。

楽器・口寄せ・和琴・歌と舞のコラボレーションがすばらしく感動した。

一回限りのものではなく、ぜひ継続的な取り組みとして、このような公演やプロジェクトをつづけてほしい。

「博多水引デザイン」との協演など、地域の特性・地域の人との結びつきがまた実現できたとのこと。これからは九州や福岡の良さの再発見をしてほしい。

生物音響学会ポスター展示

日時：12月12日（土）～13日（日）

場所：九州大学大橋キャンパス多次元デザイン実験棟ホール

第二回生物音響学会年次研究発表会（国際学会）のポスター会場に、「甕の音なひ」のポスター展示とビデオ上映ブースを設置しました。微生物の働きによって発生する焼酎醗酵音はまさに生物の音であり、学会主催者・学会来場者等には、学術的な観点からも関心を持ってもらうことができました。また、ブースの横には、実際に公演に使った「甕雫」を試飲できるコーナーも設け、五感で焼酎を堪能する企画に仕立てました。

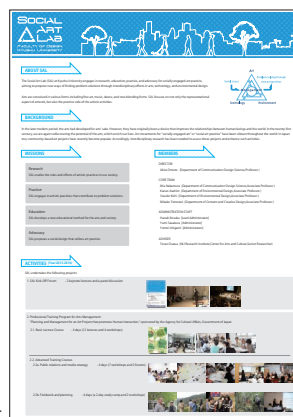
この連携企画は、今回の神楽公演を広く広報することに貢献しただけでなく、アートを他の学問領域と結びつけるひとつのきっかけにもなりました。



ポスター展示の様子



企画の説明の様子



展示したポスター

連携企画

「カルチャーナベ」フィールドトリップ

※CULTURE NABE ~ international communication ~
（公式名：English Community Space）

日時：12月12日（土）14:00-19:00

訪問地：柳橋連合市場、住吉神社

参加者：22名（日本人学生8名（学部生3名、修士生4名、博士生1名）、
留学生13名（スウェーデン、ドイツ、フランス、中国、トルコ、韓国）、
担当職員1名）

公演当日、大学のグローバル学生交流センターの担当者と共に、現代神楽「甕の音なひ」の公演鑑賞をするエクスカージョンを企画し、実施しました。以下は、担当者によるその日の記録です。

今回の「CULTURE NABE」フィールドトリップの参加者は留学生、日本人学生の合計22名。目的は、住吉神社で行われるソーシャルアトラボ主催の「甕の音なひ」への参加である。

目的地まで歩く途中「柳橋連合市場」に立ち寄る。お正月前の「博多の台所」には、英語を話す和菓子屋さんやコーヒー屋さんもあり、意外にインターナショナル。活気がある。数の子や初めてみる食材に「何これ?!」と騒ぐ留学生に日本人学生が、「えっと何だっけ? Fish eggs? これ日本ではお正月に食べる食べ物なんだよ」と英語で説明する。市場を一通り巡り、鯛の刺身やおせんべい、カフェオレを片手に、一行は「甕の音なひ」の会場、住吉神社能楽殿へと向かう。

会場は全て座布団席。舞台のバックには大きな松の木が描かれており、その前に「博多水引き」で装飾された焼酎の「甕」が五つ、等間隔に並んでいる。参加者に「焼酎と酒の違い」と「能と舞踏」の説明を簡単にし、それぞれ好きな席に座ってもらう。会場がいっぱいになった所で、ソーシャルアトラボのラボ長、尾本先生からWelcomeのご挨拶があり、待ちに待ったパフォーマンスがついにはじまる。一気に会場の雰囲気が変わる。真っ白の服を纏う四人の声のパフォーマー、笛奏者、箏奏者、舞踏家らがそれぞれ焼酎の甕から産まれる音を現代的・前衛的に表現する。ささやくような声からはじまり、少しずつ和楽器と舞が融合し、だんだんとテンポがあがり、大騒ぎしたかと思うと、また静かに消えていく。

参加者からは、何だか不思議で意味はよくわからなかったけど、美しくて幻想的だった、ちょっと怪しげでまるで幽霊を見ているみたいだった、でも時々何故かおかしくて吹き出してしまった、いつの間にか世界に引き込まれて時間を忘れてしまった、などなど興味深い感想が聞かれた。

最後に甕から柄杓で一人ひとりにふるまわれた焼酎の試飲をしながら、取材のカメラにむかって、留学生も日本人学生も良かった、貴重な体験だったとコメントをしていた。またこのようなイベントがあれば、ぜひ参加したいそうだ。

九州大学 大橋キャンパス グローバル学生交流センター
岡 千世



参加者の声

普段能楽堂に入ることはないので良かった。

「甕の音なひ」は、古来日本の文化だけでなく、それらが合わさった新しいスタイルのもので、日本人である僕でさえ新鮮な印象を受けた。留学生と一緒にこのようなイベントに参加することで、彼らの反応から、日本人の僕だと気づかないことに気づかされる。今回も貴重な体験となった。

今回のパフォーマンスは、まるで宇宙旅行をしているような感じだった。部屋全体の音の動きやパフォーマーのゆったりとした動き、また飛んでしまうような感覚が楽しめ、大きな幸福感さえ感じた。パフォーマンスの雰囲気が徐々に強烈になっていき、まるで酔っ払っているような感覚の表現を感じた。

とても楽しかった。日本の文化に触れることができ、また日本人の友達を作ることができた。次回このようなイベントがまたあったら、是非参加したい。

焼酎の醗酵音響から現代神楽へ 「広報戦略プログラム」のケーススタディとして

本格焼酎の90%以上を生産する九州は、さまざまな地域や原材料がもつ独自性を生じた多様な焼酎文化を発信しています。その生産過程における醗酵という生命現象が生み出す音響に対する興味から「醗酵音響アートプロジェクト」を立ち上げました。そして、九州各地の焼酎蔵元をいくつか訪ね、醗酵の現場となる醗（もろみ）のなかに特殊に養生した水中マイクを沈めて、さまざまな醗酵の響きを収録しています。

この醗酵音響がもつ意味を考えていたときに、カミが発する声と見立てることによって、そこにカミと人間との交感の場としてのあらたな「神楽」の構想が浮かんできました。そして、昨年度（2015年）3月に九州大学大橋キャンパスの多次元デザイン実験棟内ホールにて、現代神楽「甕の音なひ」を上演することになりました。かつて、多くの焼酎蔵元では、醗を湛える器として甕が用いられていましたが、その甕のなかから「音なひ」というカミのささやく声と呼び出すという場面設定のなかで、神楽のあらたな演目が笙や和琴、声、舞によって演じられたのです。その演目の創作にあたっては、神楽の起源ともいわれる志賀島に伝わる阿曇（安曇）磯良の神話がヒントになりました。

今年度は、「広報戦略プログラム」の一環として、この醗酵音響による現代神楽がケーススタディとして取り上げられ、2015年12月12日に博多の住吉神社能楽殿にて上演されました。この「能楽殿ヴァージョン」では、能の構造や舞台がもつ象徴性のなかで、「五色」の水引で結ばれた五つの甕から醗酵音響がきこえはじめ、さらに能楽殿全体がその音響によって満たされながら、声や舞などが一体となった舞台となりました。

焼酎は、九州の文化を語るうえで欠かせない存在ですが、その焼酎の生産過程での醗酵の響きから生まれた現代神楽は、九州の土地がもつ神話性を浮かび上がらせる試みとなりました。

藤枝 守（九州大学大学院芸術工学研究院教授・作曲）



写真：園田裕美

Part 4

ソーシャル アートカフェ

6
june

キックオフ・フォーラム

●

ソーシャルアートカフェ①
26(金)

●

7
july

ソーシャルアートカフェ②
10(金)

基礎コース①②

8
august

基礎コース③

●

9
september

ソーシャルアートカフェ③
5(土)

実践コース〈広報戦略プログラム〉

ワークショップ①

フォーラム①「メディアに響く企画・広報」

フォーラム②「九州という固有性から発信する」

ワークショップ②

基礎コース④

10
october

●

ソーシャルアートカフェ④

2(金)

実践コース〈企画立案プログラム〉

フィールドワーク

ワークショップ①

ワークショップ②

11
november

12
december

現代神楽公演「甕の音なひ」

毎回ゲストを迎えて、アートと社会の未来について語り合うカジュアルなミーティング「ソーシャルアートカフェ」を開催しました。九州沖縄地域で行われている多様な活動についての情報交換をしながら、新しい人的ネットワークを構築することを目的としています。

第1回

6月26日(金) 19:00-21:00

ゲスト：松崎 宏史 (Studio Kura 代表)

福岡県糸島市でアーティスト・イン・レジデンスを営む松崎さんが、新しい場をひらく際の工夫や、地域住民との関係性の変化について話しました。

Studio Kura
<https://www.studiokura.com/>



第1回ゲスト 松崎さん

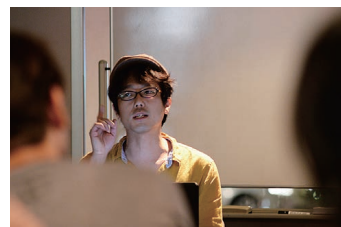
第2回

7月10日(金) 19:00-21:00

ゲスト：小野寺 睦 (佐賀県：旅をする木 代表)
大松 康 (清か農園・産の森学舎)
浦田 剛大 (スタジオターン)

佐賀市三瀬で養鶏家を営みながら地元の資源を活用した新しい暮らしの提案を行う小野寺さんが、人々の多様性を担保しながらコミュニティを維持するための工夫や課題を紹介しました。糸島市でフリースクールを営む大松さんは、子どもにも多様な学習の場を提供したいという思いを実現する経緯を語りました。そして、家具職人を主軸に自由な発想で活動する浦田さんからは、地域に根差した日頃の活動が紹介されました。

旅をする木 <http://www.ecolon.co/#!> 小野寺 - 睦 -
佐賀県三瀬村 -/c20qd/5583407a0cf27a6b745515ad
<http://tsunagatte-meal.com/?eid=65>
産の森学舎 <http://www.sannomori.org/>
スタジオターン <http://www.twoone.net/ta.home.html>



第2回ゲスト (上から) 小野寺さん、大松さん、浦田さん

第3回

9月5日(土) 19:00-21:00

ゲスト：鎌田 東二 (京都大学こころの未来研究センター教授)

沖縄県久高島を舞台にした映画「久高オデッセイ三部作」に関わってきた鎌田さんが、沖縄の文化や歴史、人々の歴史の独自性について講演しました。

鎌田東二オフィシャルサイト <http://homepage2.nifty.com/moon21/>
鎌田東二『超訳 古事記』ミシマ社、2009年
鎌田東二『神と仏の出逢う国』角川学芸出版、2009年
鎌田東二『古事記ワンダーランド』角川学芸出版、2012年
鎌田東二『歌と宗教』ポプラ社、2014年 ほか



第3回ゲスト 蒲田さん

第4回

10月2日(金) 19:00-21:00

ゲスト：中野 由紀昌 (Edit Station「瓢箪座」代表)

チラシや雑誌などの「紙」の編集だけでなく、「場」の編集デザインに注目し、ユニークな企画を次々と生み出す中野氏さんより、九州の素材を独自の視点で編集し、新しい関わりの中におく自身の経験が紹介されました。

Edit Station「瓢箪座」 <http://www.hyoutanza.com/>
九州遊会 <http://kyuten.jimdo.com/>
イシス編集学校 九天玄氣組 <http://kyuten.jimdo.com/>
宇佐美 陽一『身体造形思考ノート〜オイリュトミーを聴き、歌う』瓢箪座 (中野 由紀昌) 編集、花書院、2012年



第4回ゲスト 中野さん

参加者の声

ゲストの人はもちろん、他の参加者と密な交流をすることができた。

地域社会に入り込んだ地道な活動とその背後にあるマネジメントのスキルを、具体的に知ることができてよかった。

実際に活動をしている人にしかわからない事情や苦労話を聞くことができて、ためになった。

ソーシャルアートラボの一年を振り返って

2015年度のソーシャルアートラボを振り返ると、改めて、多彩な講師陣と内容の充実したプログラムだったと感じます。全国各地の先進事例から知識や技術を学ぶとともに、実践の現場で企画立案と広報戦略を学ぶ機会を、広域から集う参加者に提供できました。また参加者は、文化芸術分野だけでなく、まちづくりや地方創生などに関心を持っていました。これは、九州大学が有する豊富な人的資源、ネットワーク、地域に対する貢献、連携の積極的姿勢がなければ実現できないことだと思っています。

近年、文化芸術と社会との関わりは、ますます不可分のものとなっています。文化芸術は、世間から隔絶した個人の贅沢品ではなく、社会とともにある営みです。また、地域の魅力や課題に関与し、新しいつながりの媒介となるものです。

その理念を提示した初年度のソーシャルアートラボは、ともに第一歩を踏み出した仲間たちとお互いの手を伸ばし合い、今後もネットワークを広げていくことでしょう。

アドバイザーという立場を与えられた私自身、それほど学ぶことが多かったでしょうか。そのことを思うと、育成する側から育成される側へと一方的に与えることが人材育成ではなく、お互いが持つ知恵や経験を、与えたり受けたりする循環の中で人が育まれることを実感しました。ソーシャルアートラボの初年度の活動によって蒔かれた種は、将来、確実に芽吹き、根を下ろし、葉を広げ、花を咲かせて実を結ぶことでしょう。私はその確かな手応えを感じています。

SALアドバイザー
ニッセイ基礎研究所准主任研究員
大澤 寅雄

平成27年度に作成したチラシ・プログラム・WEBサイト



デザイン：石上 洋明 (SAL)



デザイン：大村 政之 (couleur)



デザイン：ジーエータップ

デザイン：森 美千子



デザイン：石上 洋明 (SAL)

ソーシャルアート・フォーラムー大学と地域との協働ー

平成28年2月28(日) 13:30~17:00

九州大学大橋キャンパス2号館2階 環境設計ギャラリー・プレゼ室

九州大学ソーシャルアートラボは、地域でユニークな活動をする人々と大学の新たな協働・連携のあり方を探り、豊かな社会の実現に寄与するアート実践の可能性を議論するフォーラムを開催しました。

第一部はSALアドバイザーの大澤寅雄さんのナビゲーションのもと、実践コースの担当教員たちが一年の活動を振り返りました。第二部では、ゲストがそれぞれの取組を紹介した後に、地域と大学の今後の協働の可能性を展望しました。このフォーラムで何度も話題になったのが、地域資源や地域の人々を結びつける力の重要性、地域との向き合い方を根本的に再考する必要性、そして協働の仕組みの整備でした。学生が大学と地域をつなぐクッション役としての可能性をもっているという意見や、大学での基礎研究や専門的な研究を、大学外の人にわかりやすく、かつ面白く伝えることができる通訳者・編集者が必要という意見がフロアからも出て、活発な議論が行われました。



〈プログラム〉

第一部：ソーシャルアートラボの活動
第二部：地域での取組と大学との協働

〈ゲスト〉

白水 高広 株式会社 うなぎの寝床 代表取締役
伊藤 寛 九州大学大学院 非常勤講師(大林組)
竹石 明弘 ラブフェム国際放送株式会社 局次長
小森 耕太 NPO法人山村塾 事務局長
永田 賢介 仮認定NPO法人アカツキ 代表理事
大澤 寅雄 SALアドバイザー、ニッセイ基礎研究所 准主任研究員



アートを「デザイン」するマネジメント

アートマネジメントは、1960年代にアメリカで、ビジネスのマネジメントを芸術に応用する試みとして始まりました。当初は美術館や劇場を運営するノウハウ、芸術家や文化活動の支援などが主要なテーマでしたが、半世紀が経過し、アートや社会のあり方が大きく変化した現在、その射程や課題に見直しが必要とされています。また、アートマネジメントは、都市の芸術活動を念頭に構想されましたが、人口減少や少子化に直面する九州・沖縄地域では、その前提についても再考が迫られています。

こうした問題意識から、平成27年度の「新しい交流の場を切りひらくアートマネジメント」では、アートの企画を社会的コンテクストの中に位置づけ、その潜在的可能性を社会に訴えながら、戦略的に実現していくスキルを身につけることをテーマとし、非都市型のアートマネジメントを模索してきました。とくに重要視したのが、自分の好きなアートを広めるのがアートマネジメントではないということです。自分の信じることを盲目的に広めるのでは、新興宗教の勧誘と同じになってしまいます。そこで、地域の自然資源や文化資源を知り、それをうまく活用するスキルや、地域の人々を巻き込むスキルを身につけるための基礎的・実践的プログラムを実施しました。ゲスト講師の何人かが口にした言い方を借りるなら、「本当に面白いことを、面白いやり方でやる」ということです。

プログラムの実施を通して、キックオフ・フォーラムで問われた「アートは手段か目的か」という問いに答えが見えてきました。アートを広めることが目的になっては、先述したように新興宗教と同じになってしまいます。一方で、アートが手段化したら（たとえば経済を活性化する手段になってしまったら）、それはもうアートとは言えなくなってしまいます。実際、アートが手段なのであれば、そのマネジメントはビジネススクールで学ぶことができるはずです。結局のところ、アートマネジメントは、アートをいったん目的として、アートを体験する場を人々に供給しつつ、それを一方で手段として、人と人との関係を築くことを促すものと考えるべきなのではないでしょうか。

そうだとすれば、重要になるのは、「デザイン」（設計）スキルでしょう。つまり、社会の中にどんな（実践としての）アートを、どのようにデザインすれば、人と人がうまく結びつき、お互いの潜在力を引き出し合うことができるのか、と

いうことです。デザインはある目的のための手段なので、アートとは相容れません。しかし、アートをマネジメントすることはデザインであるべきです。もちろん、うまくデザインをしたからといって、思い通りの結果が得られるわけではないかもしれません。でも、セレンディピティが生まれる確率を高めるための企画や運営はできるはずです。そうした企画が、次なるセレンディピティを生み、その新しいセレンディピティが更なるセレンディピティを誘発する。アートマネジメントの醍醐味は、まさにこうした創造性にあるのではないのでしょうか。平成28年度は、この点に照準をあてたプログラムを展開していこうと考えています。引き続き、よろしくお願いいたします。

九州大学大学院芸術工学研究院准教授
中村 美亜

福岡県

福岡県
福岡市
（公財）福岡市文化芸術振興財団
ART BASE 88
福岡地域戦略推進協議会（FDC）
（株）西日本新聞社
NPO法人山村塾
もやい بانک福岡
Studio Kura
産の森学舎
スタジオターン
Edit Station「瓢箪座」
ながさわ結納店
住吉神社
香椎宮
Sho-Chu プロジェクト
仮認定NPO法人 アカツキ

佐賀県

旅をする木

熊本県

河原町文化開発研究所
Sho-Chu プロジェクト

鹿児島県

しょうぶ学園
Sho-Chu プロジェクト

講師 & ゲストの所属機関

+ お世話になった機関

青森県

TecoLLC

宮城県

MMIX Lab
宮城教育大学
（公財）音楽の力による復興センター

東京都

文化庁
慶應義塾大学総合政策学部飯盛研究室
アーツカウンシル東京（公益財団法人 東京都歴史文化財団）
東京都市大学都市生活学部
（公財）トヨタ財団
日本芸術文化振興会
（株）朝日新聞社
独立行政法人 日本芸術文化振興会

京都府

東山アーティスツ・プレイスメント・サービス（HAPS）
京都大学こころの未来研究センター

岡山県

（公財）水島地域環境再生財団

鳥取県

鳥取大学地域学部

大分県

NPO法人 denk-pause

宮崎県

京屋酒蔵有限公司

沖縄県

（公財）沖縄県文化振興会
NPO法人地域サポートわかさ

おわりに

ソーシャルアートラボが発足して一年が経ちました。今年度、我々はこの冊子に紹介させて頂きましたように、文化庁の事業を中心として、アートと社会を結ぶ方法を模索してきました。

「新しい交流の場を切りひらくアートマネジメント人材育成事業－九州沖縄地域のアートマネジメント人材育成ネットワークの構築－」という本筋の目的に加えて、様々な関係が複雑に派生し、心地良く充実していくことを実感しました。アートが持つ潜在的なチカラのなせる技なのでしょう。同時にそれらの活動を通して、多くの方々がアートのチカラを活かして、様々な取り組みを行われていることも知りました。継続的に行われている地道な活動、意外な組み合わせから生じる先進的な試み、いずれも貴重な取り組みです。

今更ながらですが、アートと音響工学の領域との親和性の高さも再認識しました。特に多くのスピーカを用いる音場再生は、工学的な実現の難しさを補うアート表現の美しさ、アートとしての表現の限界をサポートする工学的なシステムなど、相補的な関係があると思います。今後も「共演」の可能性を探っていきます。

今年度、頼りないラボ長として関わらせていただきました。コアメンバーである朝廣先生、岸先生、知足先生、中村先生、アドバイザーの大澤寅雄様、実践コースにご協力いただいた藤枝先生、池田先生、小森様、この他ご協力をいただいた教員の皆様、そして優秀なスタッフと学生さん達の本当に前向きなご協力と献身的な働きで、充実して密度の濃い一年を過ごすことができました。また芸術工学研究院安河内研究院長、市山事務部長はじめ執行部、事務局の皆様には全面的なご協力をいただき、常に我々の活動を鼓舞し、そしてモチベーションを高めていただきました。心より御礼申し上げますとともに、今後も変わらぬご協力をお願い致します。ありがとうございました。

九州大学大学院芸術工学研究院教授
ソーシャルアートラボ ラボ長
尾本 章

メディア掲載一覧

2015.11.28

西日本新聞

» 焼酎の醗酵音響による現代神楽「甕の音なひ」
来月12日公演

2015.12.02

日本経済新聞(夕刊)

» 焼酎の醗酵音響による現代神楽「甕の音なひ」

2015.12.03

毎日新聞

» 焼酎の発酵音と芸術が協演

2015.12.03

朝日新聞

» 焼酎の醗酵音響による現代神楽「甕の音なひ」

2015.12.04

読売新聞

» 甕の音なひ

2015.12.11号

地域情報誌 FUKUOKA Bi:Ki:

» 現代神楽「甕の音なひ」

2015.12.13

西日本新聞

» 焼酎の発酵音で舞う

2016.02.18

毎日新聞

» ソーシャルアート・フォーラム「大学と地域との協働」

2016.02.18

読売新聞

» ソーシャルアート・フォーラム「大学と地域との協働」

九州大学ソーシャルアートラボ 平成27年度の運営スタッフ

企画運営

[ラボ長] 尾本 章 (コミュニケーションデザイン科学部門 教授、応用音響工学)

中村 美亜 (コミュニケーションデザイン科学部門 准教授、芸術社会学)

高坂 葉月 (学術研究員、事務局長)

佐々倉 由美 (テクニカルスタッフ、会計事務担当)

石上 洋明 (テクニカルスタッフ、機材・デザイン担当)

大澤 寅雄 (SALアドバイザー、ニッセイ基礎研究所芸術文化プロジェクト室准主任研究員)

プロジェクト担当

知足 美加子 (コンテンツ・クリエイティブデザイン部門 准教授、彫刻)

朝廣 和夫 (環境デザイン部門 准教授、緑地保全学)

池田 美奈子 (デザインストラテジー部門 准教授、情報デザイン)

藤枝 守 (コミュニケーションデザイン科学部門 教授、作曲)

小森 耕太 (NPO法人山村塾 事務局長)

協力教職員

岸 泰子 (環境デザイン部門 准教授、日本都市・建築史)

中島 祥好 (デザイン人間科学部門 教授、知覚心理学)

上田 和夫 (デザイン人間科学部門 准教授、聴覚心理学・聴覚認知心理学)

高田 正幸 (コミュニケーションデザイン科学部門 准教授、音響心理学・音響工学)

山内 勝也 (コミュニケーションデザイン科学部門 助教、音響心理学・騒音環境学)

稲村 徳州 (九州大学大学院芸術工学研究院 学術研究員)

岡 千世 (九州大学留学生課グローバル交流センター〈大橋〉職員)

Special Thanks

James Jack (東京芸術大学特任講師)

伊藤 寛 (九州大学大学院 非常勤講師、大林組)

古賀 昌美 (九州大学大学院芸術工学府修士課程)

事業共催

公益財団法人 福岡市文化芸術振興財団

アートが生まれる場所、アートが紡ぐ時間

九州大学ソーシャルアートラボ 平成27年度 活動報告書

2016年3月31日発行

編集 高坂 葉月、中村 美亜

写真 尾本 章

デザイン 大村 政之 (couleur)

発行 九州大学ソーシャルアートラボ

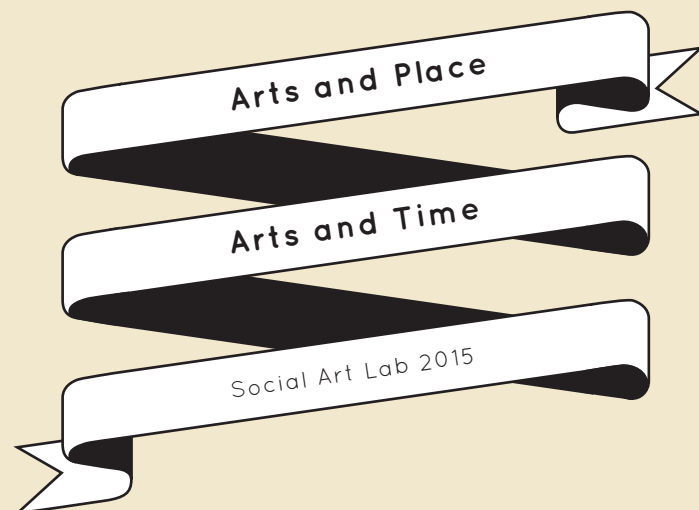
〒815-8540 福岡県福岡市南区塩原4-9-1

九州大学大橋キャンパス多次元デザイン実験棟 ソーシャルアートラボ事務局

TEL&FAX: 092-553-4552

E-MAIL: sal@design.kyushu-u.ac.jp URL: http://www.sal.design.kyushu-u.ac.jp/

©2016 九州大学ソーシャルアートラボ



九州大学
大学院芸術工学研究院
大学院芸術工学府
芸術工学部

Faculty of Design
Graduate School of Design
School of Design
Kyushu University

